大屋敷遺跡 V

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

大屋敷遺跡 V

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．大屋敷遺跡と赤城山

2．大屋敷遺跡出土土器

序

大屋敷遺跡の調査も本年度で第Ⅴ次発掘調査を終了しました。かつては、大渡橋を王が渡る橋といい、大屋敷は王の屋敷であるともいわれました。王山古墳も近くに存在し、まさに王、王、王であります。地名を聞いただけでも、有力な豪族が勢力を振るった土地であろうと推定されます。

近くには総社古墳群、推定国府跡、国分寺跡と重要な遺跡が隣接しており、古墳時代から平安時代にかけて、上野国の中心の地でもあったことが分かります。また、推定上野国府跡には蒼海城もあり、中世においてもこの地が栄えていたことが想像できます。

大屋敷遺跡発掘調査は大屋敷地区土地区画整理事業に先立つもので、道路敷範囲で行ったものです。

この地域の出土品の特徴は、古墳時代にあります。剣等に代表される石製模造品や臼玉の出土が大変多く、更に、高崎観音山古墳から出土したものとほぼ同一の長頸壺や、大型の瓶、石製模造品が住居跡から発見されることに、この遺跡の性格が物語られているように思えます。

また、中世の居館とも思える環濠の存在も確認されています。

今回の調査は、黒色土層の中に竪穴住居を構築してあるため、住居址の発見に苦労いたしました。作業員さんたちの懸命の努力で古墳から平安時代の住居址を確認できました。

本年度（第Ⅴ次）の出土品では、石製模造品の出土数は少なかったものの、金銅製鉸具の確認もあり遺跡の性格づけによい資料が得られたと考えています。また、Ⅰ～Ⅴ次までの発掘調査を集約し、大屋敷遺跡全体の性格を考える資料をまとめることができました。

これからの地区の歴史解明の一助になれば幸いです。

調査にあたりまして、御協力をいただきました、土地区画整理組合、都市計画課部、その他の関係者の皆様に感謝申し上げます。

平成９年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　　中　西　誠　一

例　　言

1．本書は、前橋市大屋敷地区土地区画整理事業に伴う大屋敷遺跡Ⅴ発掘調査報告書である。
2．遺跡は、群馬県前橋市総社町大字総社1991番地ほかに所在する。
3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 中西誠一が、前橋市大屋敷地区土地区画整理組合 代表者 大山栄一と委託契約を締結し実施した。
　調査担当および調査期間は以下の通りである。
　発掘・整理担当者　井野誠一（前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査係）
　　斉藤仁志（　　同　　上　　）
　　吉田聖二（　　同　　上　　）
　発掘調査期間　平成8年5月8日～平成8年10月21日
　整理・報告書作成期間　平成8年10月22日～平成9年3月25日
4．本書の原稿執筆・編集は井野・齊藤・吉田が行った。整理作業をはじめ図版作成は、石原義夫・岩木　操・岸フクエ・赤石忠彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅道子・赤城美代子・岩田敏子・生形かほる・大塚美智子・鬼塚成子・佐野貴恵子・柴崎まさ子・神保千代子・戸丸澄江が作業を行った。
5．下記の専門的分野については、次の方々のお世話になった。（敬称略）
　土器観察：綿貫綾子（群馬町教育委員会）
　腰 帯 具：平方篤行（藤岡市立西中学校）
6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。
7．金銅製鉸具については、H－221号住居址出土（大屋敷遺跡Ⅳ・平成7年度調査）であるが、大屋敷遺跡Ⅳ発掘調査報告書で取り扱えなかったため本書に掲載することとした。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。
2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。
3．本遺跡の略称は8A60である。
4．各遺構及び遺構施設の略称は次のとおりである。
　H…古墳・奈良・平安時代の住居址　D…土坑　W…溝址　P…柱穴
5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。
　遺構　住居址・土坑…1/60　竈断面図…1/30　溝址…1/100
　　全体図…1/400
　遺物　土器…1/3・1/4　石製模造品…2/3　臼玉…2/3
　　石器・石製品…2/3　土製品…2/3　金属製品…1/1
6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。
　遺構断面図　構築面…斜線
　遺物実測図　須恵器断面…　黒塗り

―― 目　　次 ――

序 …… i

Ⅰ 調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地 …… 1

2 歴史的環境 …… 1

Ⅲ 調査の経過

1 調査方針 …… 5

2 調査経過 …… 6

Ⅳ 層　　序 …… 6

Ⅴ 遺構と遺物

1 住居址 …… 7

2 溝　　址 …… 9

3 土　　坑 …… 9

Ⅵ まとめ …… 12

Ⅶ 付　　編

大屋敷遺跡出土の金銅製鉸具について（平方 篤行） …… 19

図　　版

口絵　1　赤城山と大屋敷遺跡
　　2　大屋敷遺跡出土土器

PL. 1　A区全景、住居址（H－277，278）、W－14
　　2　住居址（H－279，281，284）、D－168
　　3　住居址（H－285，286）、D－170
　　4　住居址（H－288，289）
　　5　B区西全景、住居址（H－290，291）
　　6　H－278～289号住居址出土の土器
　　7　H－289～291号住居址出土の土器
　　8　石器・石製品・土製品、金属製品

挿　　図

頁

Fig. 1　大屋敷遺跡の位置 …… v
　　2　位置図と周辺遺跡図 …… 2
　　3　大屋敷遺跡周辺図 …… 4
　　4　グリッド設定図 …… 5
　　5　標準土層図 …… 6
　　6　時期別遺構分布図1
　　（5世紀後半～6世紀前半） …… 13
　　7　時期別遺構分布図2
　　（6世紀中葉～7世紀前半） …… 14
　　8　時期別遺構分布図3
　　（7世紀中葉～8世紀前半） …… 15
　　9　時期別遺構分布図4
　　（8世紀中葉～9世紀前半） …… 16
　　10　時期別遺構分布図5
　　（9世紀中葉～11世紀） …… 17
　　11　大屋敷遺跡出土金銅製鉸具実測図 …… 20
　　12　遺跡・遺構全体図 …… 21
　　13　H－277・278，284号住居址 …… 22
　　14　H－279・282，280号住居址 …… 23
　　15　H－281，290号住居址 …… 24
　　16　H－286・287号住居址 …… 25
　　17　H－285，288号住居址 …… 26
　　18　H－289，291号住居址 …… 27
　　19　W－14、D－167·168·169·170·171 … 28
　　20　H－278～284号住居址出土土器 …… 29
　　21　H－284～289号住居址出土土器 …… 30
　　22　H－289・290号住居址出土土器 …… 31
　　23　H－289～291号住居址出土土器、
　　A・B区表採土器 …… 32
　　24　石器・石製品、土製品、金属製品 …… 33

表

頁

Tab. 1　土器観察表 …… 10
　　2　石器・石製品、土製品観察表 …… 11

【調 査 協 力】　群馬県教育委員会文化財保護課　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
前橋市大屋敷地区土地区画整理組合　前橋市都市計画部都市計画課

大屋敷遺跡の位置（丸印）

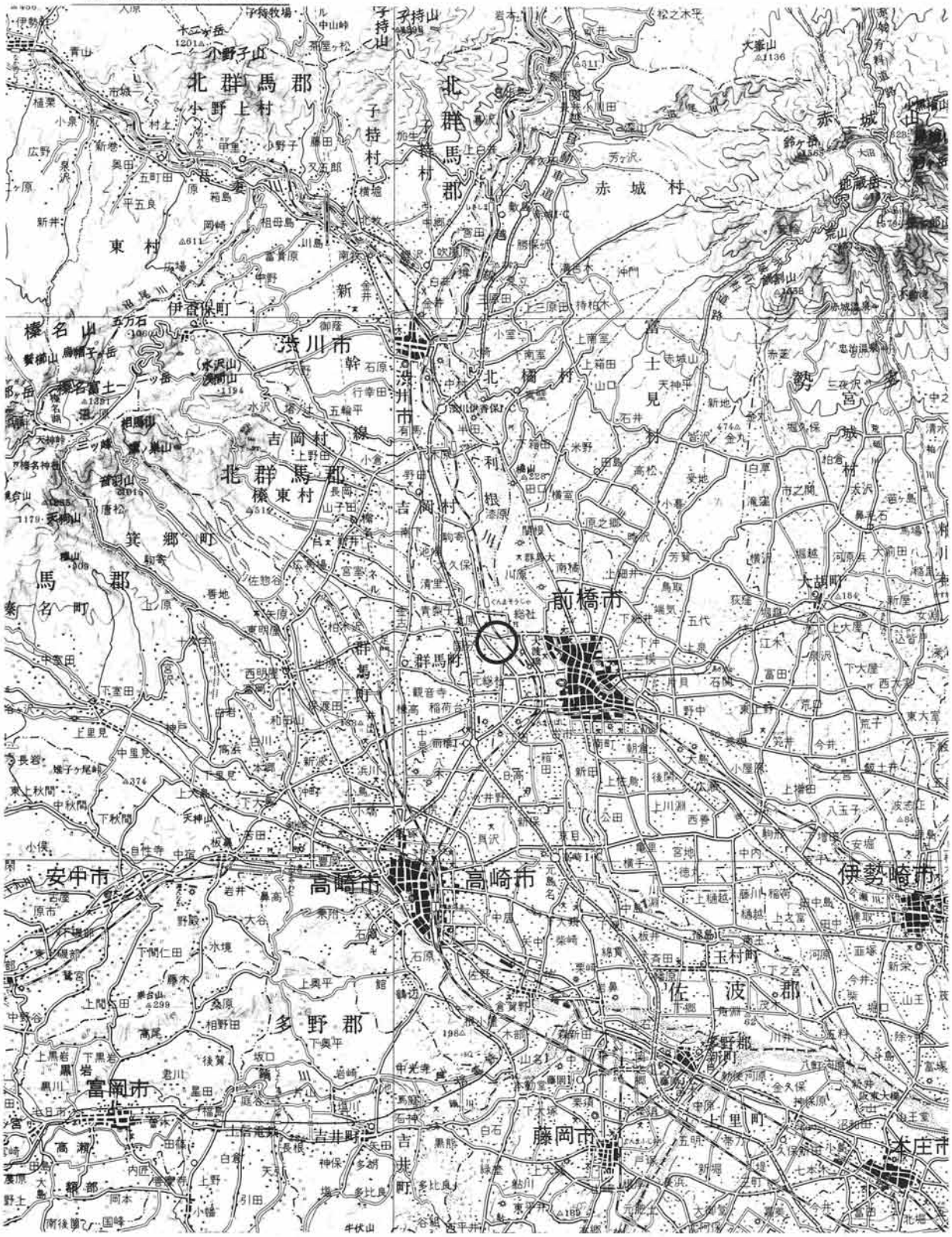


Fig. 1　大屋敷遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市総社町大屋敷地区を対象とした土地区画整理事業実施に伴い、大屋敷地区の土地区画整理を目的とした前橋市大屋敷地区土地区画整理組合（代表者　大山栄一）と前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で、平成４年７月27日に締結された５年間にわたる発掘調査に関する覚書に基づいて実施されている。発掘調査最終年度となる本年度は、４月24日に組合と調査団との間で発掘調査に関する委託契約が締結され、５月８日より現地での発掘調査を開始した（調査区内に現存する家屋等の移転が遅れたため、６月から８月下旬まで一時調査休止）。本年度の調査面積は972㎡であり、遺跡の最西南部に当たるＴ字形部分及び平成７年度調査のＣ区から北側に続く部分の調査となった。遺跡名称は「大屋敷遺跡Ⅴ」とし遺跡略称は８Ａ60とした。

なお、初年度、覚書を締結し、発掘調査を実施するはこびとなった経緯については、「大屋敷遺跡Ⅰ」に詳しく述べられているので本書では省略する。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

大屋敷遺跡は前橋市街地（県庁付近）から利根川を隔てて、北西約３㎞の地点に所在する。遺跡地の地番は前橋市総社町総社1937番地ほかである。遺跡地の周囲は主要幹線道が縦横に走っている。北側100ｍ付近には前橋・箕郷線が東西に走り、西側は市道大友西通線（通称、産業道路）が、また約300ｍ程東にはＪＲ上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。遺跡地の立地は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地の扇頂部より流下する河川群のひとつ、八幡川左岸域の標高123～126ｍの微高地上にある。位置的には、相馬ケ原扇状地面と前橋台地面の境界付近を占地する。

遺跡地の南側には榛東村に源を発する八幡川が南東方向に流れ、東側には江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水が南流し、両者は遺跡地の南東脇で合流し滝川と名前を変えた後、利根川と並行する形でさらに流下してゆく。遺跡地と滝川の接する部分は比高５～６ｍほどの段丘崖を呈し、遺跡地を含む段丘上は高燥化した台地が広がり、桑園・畑作地を主としているが、一部水田として利用されている。

２　歴史的環境

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中世にかけてであるが、調査区の出土遺物のなかには縄文時代中期、加曽利Ｅ式の土器片も若干検出されているので、ここでは本遺

1．清里・陣場遺跡群　2．中島遺跡　3．長久保遺跡　4．清里・庚申塚遺跡　5．清里南部遺跡群　6．熊野谷遺跡　7．下東西遺跡　8．総社二子山古墳　9．愛宕山古墳　10．遠見山古墳　11．蛇穴山古墳　12．宝塔山古墳　13．村東遺跡　14．山王廃寺跡　15．上野国分僧寺跡　16．国分僧寺・尼寺中間地域遺跡　17．上野国分尼寺跡　18．産業道路西遺跡　19．王山古墳　20．小見遺跡　21．草作遺跡　22．閑泉樋遺跡　23．閑泉明神北遺跡　24．寺田遺跡　25．大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡　26．元総社明神遺跡Ⅴ　27．元総社小学校校庭遺跡　28．推定上野国府　29．天神遺跡　30．染谷川遺跡　31．弥勒山遺跡　32．鳥羽遺跡　33．中尾遺跡　34．日高遺跡　35．神保遺跡　36．二子山古墳　37．八幡塚古墳　38．薬師塚古墳　39．三ツ寺Ⅰ遺跡　40．三ツ寺Ⅱ遺跡　41．三ツ寺Ⅲ遺跡　42．雨壺遺跡　43．三津屋古墳

Fig. 2　位置図と周辺遺跡図

跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から順に概観してみたい。

縄文時代の代表的な遺跡としては国分僧寺・尼寺中間地域遺跡（16）、産業道路西遺跡（18）があげられ、縄文中期・後期の遺構が集落的な規模で検出され、当該地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料となった。また熊野谷遺跡（６）からは中期加曽利Ｅ式土器を伴う住居址群のほか、遺物では早期の押型文土器や沈線文土器が検出され、当地域における初源事例を更新した。そのほかの遺跡としては、下東西遺跡（７）、清里南部遺跡群（５）、清里・陣場遺跡群（１）、中島遺跡（２）、長久保遺跡（３）、雨壺遺跡（42）などがあげられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の周辺遺跡は、集落・住居主体の遺跡と水田址関係の遺跡とに大別され、前者は八幡川、牛池川、染谷川流域などの高燥化した台地上に立地し、後者は、さらに下った平野部の後背湿地上に集中している。弥生時代中期後半の環濠集落である清里・庚申塚遺跡（４）、後期の住居が検出された国分僧寺・尼寺中間地域遺跡などは前者であり、日高遺跡（34）、新保遺跡（35）に代表されるAs－C軽石（浅間山起源：４世紀中頃）下の水田址などは後者である。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、５世紀末頃と推定される。まず、主軸70ｍを測る遠見山古墳（10）が築かれ、次いで６世紀前半代には、利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳（19）が造られる。その後、本遺跡の北約２㎞には、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳（８）、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳（９）、さらに県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳（12）と蛇穴山古墳（11）など、総社古墳群を構成する数々の古墳が連綿と築かれていく。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺跡（14）にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子がうかがえる。

奈良・平安時代になると、推定国府（28）、国分僧寺（15）、国分尼寺（17）等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡（22）、閑泉明神北遺跡（23）、小見遺跡（20）、草作遺跡（21）、大友屋敷遺跡（25）、寺田遺跡（24）、元総社小学校校庭遺跡（27）、天神遺跡（29）、染谷川遺跡（30）、弥勒山遺跡（31）等がある。また国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の基壇、礎石、堀などが確認されてきた。国分僧寺、国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められ、道筋にあたる中尾遺跡（33）、鳥羽遺跡（32）、国分僧寺・国分尼寺中間地域（16）等が発見されている。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址等が大量に検出されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて、当地では急激に集落の拡大した様子がうかがわれる。

その後、中世には長尾氏により、国府の堀割を利用したと考えられる蒼海城が築かれる。

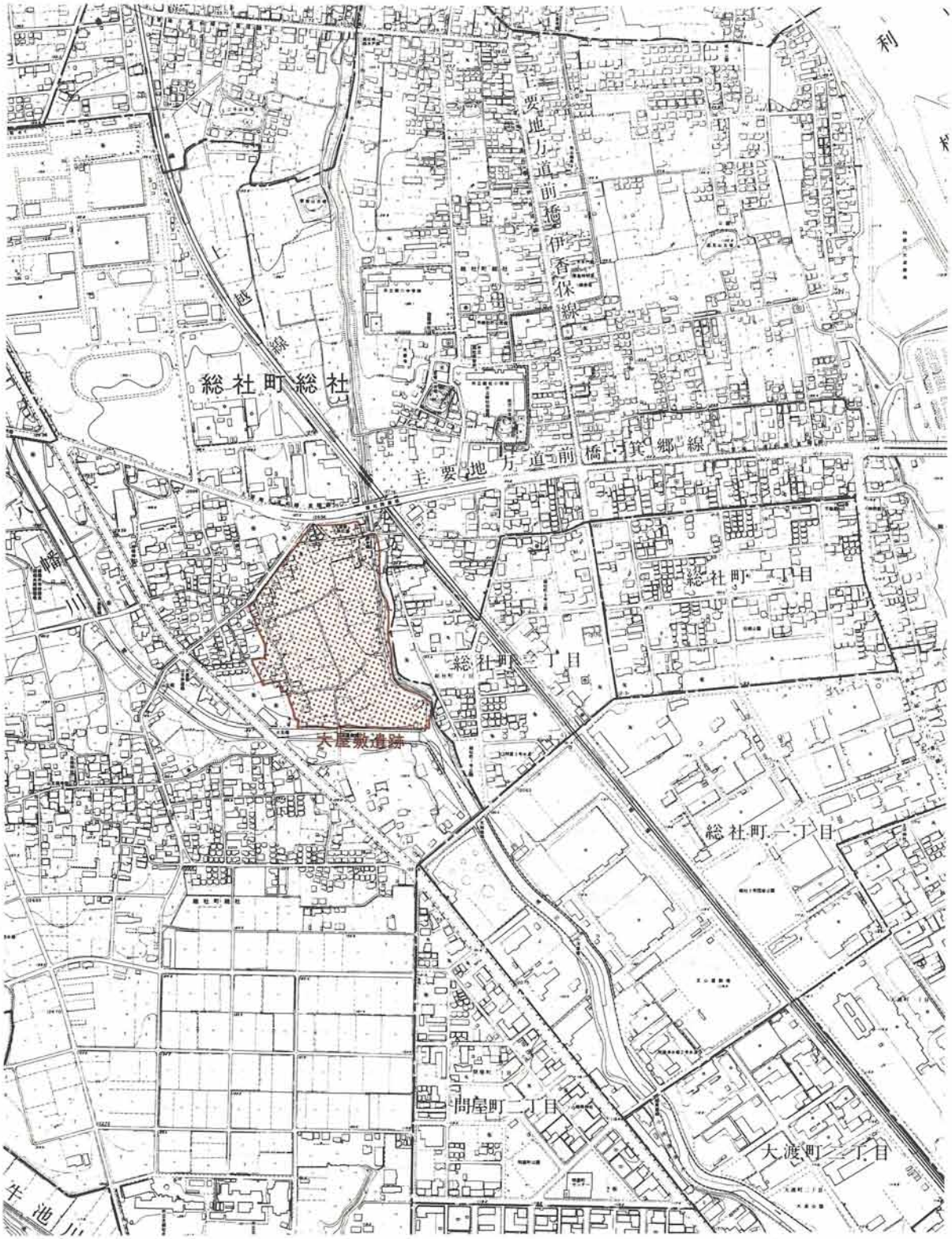


Fig. 3　大屋敷遺跡周辺図

Ⅲ 調 査 の 経 過

1 調 査 方 針

委託された調査箇所は幅６ｍ（一部幅４ｍ）の計画道路部分を中心とした972㎡である。調査区が２カ所に分かれるため、西南部分をＡ区、昨年度に続く北西部分をＢ区とした。調査実施に際しては、まず５年間の発掘調査範囲の全域をカバーする４ｍグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向をＹ軸とし、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３…、東西方向をＸ軸とし西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３…で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

１．土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。

２．10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。

３．竈は原則として縮尺1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。

なお、今年度の測量の基準点はＸ15、Ｙ66グリッドで公共座標は第Ⅸ系（Ｘ＝＋44,676m、Ｙ＝－71,300ｍ）である。

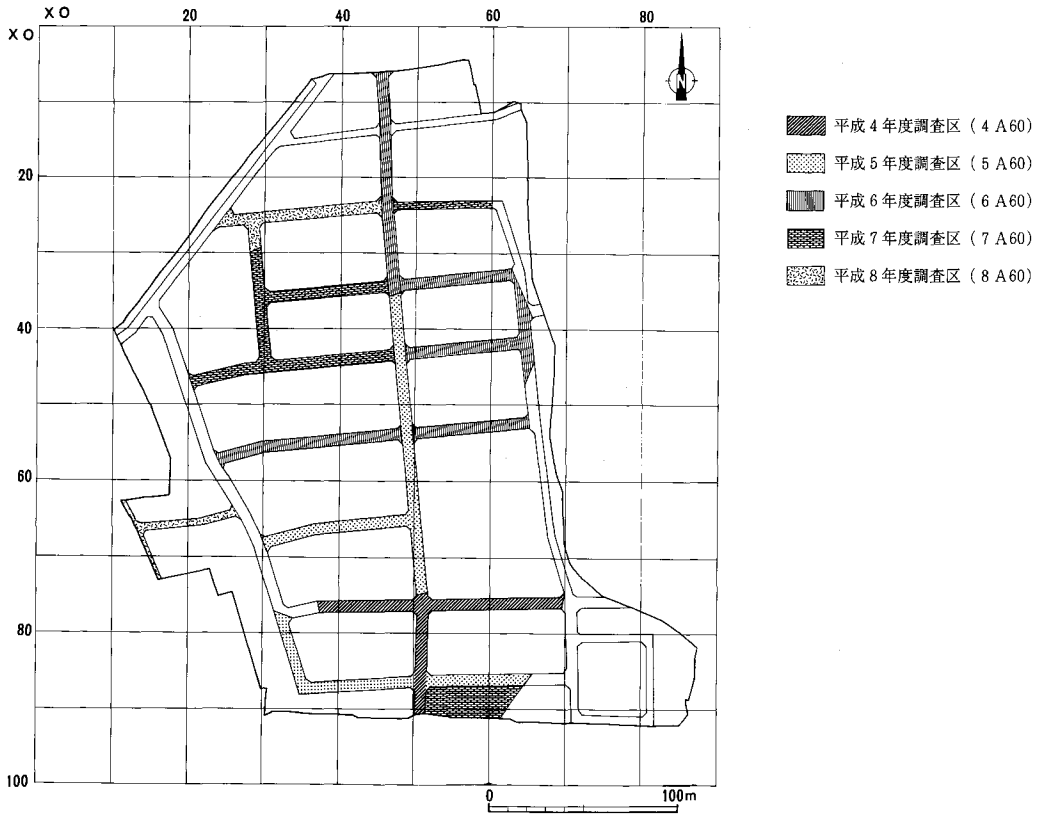


Fig. 4 グリッド設定図

2 調 査 経 過

調査最終年度となる本年度の発掘調査は、委託契約締結後の５月８日より開始した。まず、Ａ区より着手することとし、重機（バックフォー0.4m³）による表土掘削、それに追従してのプラン確認に即刻取り掛かった。Ａ区は、かつて地域の墓地として使われていた部分が広く点在し、また、最近はコンクリート片等の廃棄物の埋め場所であった部分を含むため、撹乱部分が多く調査は困難であった。中央部に比較的新しい時代の溝址が南北に検出された。中央を使用中の排水管が通っていることから人力による掘り下げを余儀なくされ大変な作業であった。住居址については、当初６軒ほどを想定したが、確認できたものは竈のみの１軒を含め３軒に留まった。

Ａ区終了後、直ちにＢ区に取り掛かる予定であったが、調査区内に現存する家屋等の移転が大幅に遅れることが判明し、一時調査を中断することとした。８月下旬、家屋等の移転が完了したことを受けてＢ区の調査に取り掛かった。ここも予想通り撹乱が多く、最終的に確認された住居址は11軒であった。10月上旬、ほぼ現地における調査を終了し、その後全体写真撮影、測量、埋め戻し等を行い、10月21日、現地における全ての作業を終了した。また、整理作業は12月２日より翌年３月25日まで城南収蔵庫整理作業室にて行い、全ての作業を完成させる運びとなった。

Ⅳ 層 序

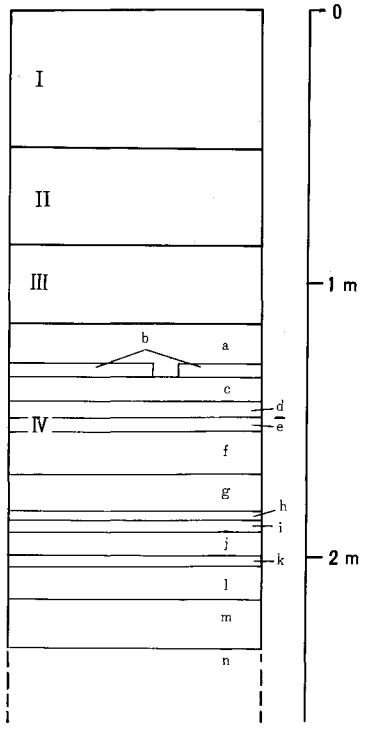


Fig. 5 標準土層図

Ⅰ 層：暗褐色粗砂層 耕作土。As－B（浅間Ｂテフラ；1108年）を若干含む。

Ⅱ 層：極暗褐色粗砂層 二次堆積のAs－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）10%、およびHr－FP（榛名二ツ岳軽石；６世紀中葉）を若干含む。

Ⅲ 層：黒褐色細砂層 二次堆積のAs－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）20%、およびHr－FP（榛名二ツ岳軽石；６世紀中葉）を10%若干含む。

Ⅳ 層：総社砂層 砂、シルトの互層。

ａ…黄褐色シルト層 ｂ…褐色シルト層

ｃ…浅黄色シルト層 ｄ…にぶい黄褐色微砂層

ｅ…にぶい黄橙色シルト層 ｆ…褐色細砂層

ｇ…灰黄褐色粗砂層 ｈ…にぶい黄色シルト層

ｉ…にぶい黄褐色微砂層 ｊ…灰黄褐色粗砂層

ｋ…にぶい黄褐色微砂 ｌ…灰黄褐色細砂層

ｍ…にぶい黄褐色細砂層 ｎ…灰黄褐色粗砂層

V 遺構と遺物

これまで大屋敷遺跡は、古墳時代から平安時代の住居址が数多く検出されてきたが、調査最終年度となる今年度の調査では、過去4年間に較べ調査面積が少なく、また、調査区内に撹乱が大変多かったことから、竪穴住居址14軒、溝址1条、土坑5基のみの検出に留まった。縄文時代中期後半の土器片も数点出土したが、住居址等の遺構は確認されなかった。

各遺構は、黒褐色の地山を掘り込む形で構築されていたと考えられるが、予想以上の撹乱により遺構確認が難しかった。特にA区は、幅4mと2mの道水路予定部分であることに加え、かつて地域の墓地として使用されてきた場所のため、表土掘削での遺物の出土状況から6軒程度の住居址を想定したが、最終的に住居址として確認できたものは3軒であった。B区についても家屋等の下にあった部分が多く、住居址は11軒の検出であった。以下は、各遺構の概要である。

なお、遺構番号は昨年度までの続き番号を使用している。(H－277～291、W－14、D－167～171である。※H－283は最終的に住居址として確認できず欠番)

H－277号住居址(A区、Fig. 13、PL. 1)

(**位置**)X13～14・Y14グリッド (**面積**) [1.6] ㎡ (**方位**)N－21°－E (**形状**)プランのほとんどが調査区外のため不明。東端部のみ検出。壁現高24cm。北側はH－278と重複しており、本遺構が新しい。(**床面**)ほぼ平坦な床面であるが、堅緻面は認められず。(**竈**)検出されず。(**遺物**)総数21点。(**備考**)出土遺物から本住居址は7世紀前半と思われる。

H－278号住居址(A区、Fig. 13・20、PL. 1)

(**位置**)X13～14・Y67～68グリッド (**面積**) [3.4] ㎡ (**方位**)N－18°－E (**形状**)プランのほぼ西半分が調査区外のため東西の規模は不明。南北は2.96mを測る。壁現高26cm。(**床面**)ほぼ平坦で堅緻な床面。柱穴等は検出できなかった。(**竈**)検出されず。(**重複**)H－277と重複。本住居址が古い。(**遺物**)総数117点。うち土器10点を図示した。脚部は破損しているが透かし孔のある須恵器高坏が出土。(**備考**)出土遺物から本住居址は7世紀前半と思われる。

H－279号住居址(B区、Fig. 14・20、PL. 2)

(**位置**)X24～25・Y25～26グリッド (**面積**) [8.5] ㎡ (**方位**)N－83°－E (**形状**)H－281・282と重複し、床面の高さもほぼ等しく明確な範囲が確定できなかったがH－282→279→281の順か。壁現高23cm。(**床面**)竈付近は堅緻面が広がる。柱穴等は検出されず。(**竈**)東壁に設置される。全長62cm、焚口部幅32cmを測る。(**遺物**)総数108点。うち土器1点を図示した。(**備考**)出土遺物から本住居址は8世紀前半と思われる。

H－280号住居址(A区、Fig. 14)

(**位置**)X12～13・Y65グリッド (**面積**) [0.2] ㎡ (**方位**)N－63°－E (**竈**)耕作等により竈の最下部のみ残る。(**備考**)住居址の時期は不明。

H－281号住居址(B区、Fig. 15、PL. 2)

(**位置**)X24～25・Y25～26グリッド (**面積**) [11.3] ㎡ (**方位**)N－76°－E (**形状**)H－279・282

と重複し、床面等では明確な範囲確定ができなかった。壁現高24cm。（**床面**）平坦な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**）東壁に設置。全長70cm、焚口部幅38cmを測る。（**遺物**）総数4点。（**備考**）出土遺物及び重複関係から本住居址は8世紀中葉と思われる。

H－282号住居址（B区、Fig. 14・20）

（**位置**）X25・Y26グリッド（**面積**）[1.9]㎡（**方位**）N－82°－E（**形状**）南側半分は調査区外。北側はH－281と重複のため不明。壁現高13cm。（**床面**）ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**）東壁に設置。全長76cm、焚口部18cmを測る。（**遺物**）総数4点。うち土器1点を図示した。（**備考**）出土遺物から本住居址は8世紀前半と思われる。

H－284号住居址（B区、Fig. 13・20、PL. 2）

（**位置**）X27～28・Y28～29グリッド（**面積**）[12.5]㎡（**方位**）N－80°－E（**形状**）長方形。東西4.12m、南北3.24m、壁現高22cmを測る。（**床面**）ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**）検出されず。（**重複**）H－289と重複。本住居址が新しい。（**遺物**）総数187点。うち土器10点を図示した。（**備考**）出土遺物から本住居址は8世紀中葉と思われる。

H－285号住居址（B区、Fig. 17・21、PL. 3）

（**位置**）X28・Y29グリッド（**面積**）[0.3]㎡（**方位**）N－102°－E（**形状**）撹乱のため竈付近のみ検出。全長85cm、焚口部幅50cm。（**遺物**）総数8点。うち1点を図示した。（**備考**）住居址の時期は8世紀後半と思われる。

H－286号住居址（B区、Fig. 16、PL. 3）

（**位置**）X31～33・Y24～25グリッド（**面積**）12.9㎡（**方位**）N－76°－E（**形状**）方形。東西3.74m、南北3.72m、壁現高19cmを測る。（**床面**）竈付近は堅緻な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**）東壁の中央に設置され、全長63cm、焚口部幅20cmを測る。（**重複**）H－287と重複しており本遺構が古い。（**遺物**）総数30点。（**備考**）出土遺物から本住居址は8世紀後半と思われる。

H－287号住居址（B区、Fig. 16）

（**位置**）X28～29・Y29～30グリッド（**面積**）[10.7]㎡（**方位**）N－75°－E（**形状**）南壁は調査区外のため不明。東西は3.84mを測る。壁現高34cmを測る。（**床面**）ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**）東壁に設置され、全長60cm、焚口部幅36cmを測る。（**重複**）H－286と重複しており、本遺構が新しい。（**遺物**）総数113点。（**備考**）出土遺物から本住居址は8世紀中葉と思われる。

H－288号住居址（B区、Fig. 17・21、PL. 4）

（**位置**）X37～38・Y24～25グリッド（**面積**）[13.6]㎡（**方位**）N－78°－E（**形状**）南側半分ほどが調査区外のため不明。東西は3.90mを測る。壁現高25cmを測る。（**床面**）ほぼ平坦で、竈付近は堅緻な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**）東壁に設置され、全長120cm、焚口部幅35cmを測る。（**遺物**）総数9点。うち土器1点を図示した。（**備考**）出土遺物から本住居址は8世紀前半と思われる。

H－289号住居址（B区、Fig. 18・21・22、PL. 4）

(**位置**)X28～29・Y27～28グリッド（**面積**)16.1㎡（**方位**)N－88°－E（**形状**)東西3.84ｍ、南北4.65ｍの方形。壁現高22㎝。（**床面**)ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**)東壁やや北よりに設置され先端部は調査区外。焚口部幅57㎝を測る。（**遺物**)総数442点。うち土器26点を図示した。（**備考**)出土遺物から本住居址は8世紀後半と思われる。

H－290号住居址（B区、Fig. 15・22、PL. 5）

(**位置**)X27・Y26～27グリッド（**面積**）[2.8]㎡（**方位**)N－77°－E（**形状**)大半が調査区外となるため竈付近及び北東隅のみ検出。南北は3.18ｍを測る。壁現高19㎝を測る。（**床面**)遺存状況が悪く堅緻面は確認できず。柱穴等も検出されず。（**竈**)東壁やや南寄りに設置。全長87㎝、焚口部幅48㎝を測る。（**遺物**)総数69点。うち土器6点を図示した。（**備考**)出土遺物から本住居址は8世紀後半と思われる。

H－291号住居址（B区、Fig. 18・23、PL. 5）

(**位置**)X28～29・Y29～30グリッド（**面積**）[11.2]㎡（**方位**)N－11°－W形状東側半分が調査区外のため不明。南北は4.08ｍを測る。壁現高34㎝。（**床面**)ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。（**竈**)検出されず。（**遺物**)総数169点。うち土器8点を図示した。（**備考**)出土遺物から本住居址は7世紀中葉と思われる。

D－167号土坑（B区、Fig. 19）

(**位置**)X28～29・Y27～28グリッド（**形状等**)長径344㎝、短径58㎝の楕円形。深さは38㎝を測る。H－289と重複。

D－168号土坑（B区、Fig. 19、PL. 2）

(**位置**)X28・Y28グリッド（**形状等**)長径58㎝、短径42㎝の楕円形。深さは45㎝を測る。断面はほぼ円筒形。H－284・289と重複。

D－169号土坑（B区、Fig. 19）

(**位置**)X29・Y28～29グリッド（**形状等**)長径250㎝、短径78㎝の楕円形。深さは39㎝を測る。H－289と重複。

D－170号土坑（B区、Fig. 19、PL. 3）

(**位置**)X31・Y24～25グリッド（**形状等**)長径84㎝、短径81㎝の円形。深さは44㎝を測る。

D－171号土坑（B区、Fig. 19）

(**位置**)X32・Y24グリッド（**形状等**)長径80㎝、短径76㎝の円形。深さは48㎝を測る。

W－14号溝址（A区、Fig. 19、PL. 1）

(**位置**)X15～18・Y65～66グリッド。（**形状等**)A区中央に位置し、調査区を南北に横切る。当初、大屋敷遺跡Ⅲで検出されたW－12・13に関連する溝址と思われたが、方向性（N－23°－E）や覆土からみて、それらよりかなり時代の下がった新しい溝址であると思われる。使用中の排水管が現存しトレンチでの調査であるが、上幅14ｍ、下幅5.7ｍを測る。薬研堀と思われる。

Tab. 1　大屋敷遺跡Ｖ遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	底部	備考	Fig
1	H－277	須恵坏身	(13.2)	－	①細粒②良好③灰④口縁部破片	端部内傾。轆轤。		受け部水平に張出す。	20
2	H－278	土師坏	(12.8)	4.2	①細粒②良好③橙④3/4	外反。横撫で。箆削り。		口縁部変換点に強い稜を有する。	20
3	H－278	土師鉢	21.8	7.3	①細粒②極良③橙④2/3	外反。横撫で。箆削り。		唇部で直立。	20
4	H－278	須恵短頸壺	－	－	①細粒②良好③オリーブ灰④口縁	端部直立。轆轤。		肩部強く丸まる。	20
5	H－278	須恵短頸壺	－	－	①細粒②良好③淡黄④胴部破片	轆轤。	肩部強く張り、くの字に折れ、釉付着。		20
6	H－278	土師甕	－	－	①細粒②良好③橙④口縁部破片	外反。横撫で。		唇部で短く直立。	20
7	H－278	土師坏	(13.2)	－	①細粒②良好③橙④1/4	外反。横撫で。箆削り。		口縁部変換点に稜。	20
8	H－278	土師坏	(13.6)	3.8	①細粒②良好③橙④1/2	二段の横撫で。		口縁部変換点で屈曲。	20
9	H－278	須恵高坏	15.5	[9.0]	①細粒②良好③明オリーブ灰④上部1/2	口縁～体部箆状工具による回転撫で。	口縁部変換点に小さい稜。３窓の透しあり。		20
10	H－278	土師小形甕	11.2	－	①細粒②良好③浅黄橙④1/2	端部直立。横撫で。		胴部緩く膨らみ口縁部で窄まる。	20
11	H－279	須恵坏蓋	10.0	2.8	①細粒②良好③オリーブ灰④完形	外傾。轆轤。横撫で。内側に返し。		小形。宝珠形つまみ。	20
12	H－282	土師坏	(10.8)	[3.8]	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	端部直立。横撫で。		体部内湾。	20
13	H－283	土師鉢	(18.2)	[3.9]	①細粒②良好③橙④1/3	外反。横撫で。箆削り。		体部浅く偏平。	20
14	H－283	土師鉢	(17.6)	4.2	①細粒②良好③橙④1/4	端部外反。横撫で。箆削り。		底～体部緩く湾曲。	20
15	H－283	須恵坏	(13.2)	4.0	①細粒②良好③灰白④1/3	外傾。轆轤。	箆起し。	底部中央凸状。	20
16	H－283	須恵甕	－	－	①細粒②良好③灰④破片	横撫で。平行タタキ。		頸部しまり。肩部大きく張る。	20
17	H－284	須恵椀	(15.7)	7.1	①細粒②良好③黄灰④1/3	轆轤。横撫で。	外周部回転撫で調整。	高台高くハの字にふんばる。	20
18	H－284	土師小形壺	(6.5)	[6.8]	①細粒②良好③橙④1/2	外傾。横撫で。	箆削り。	小形。丸底ぎみの底部。	21
19	H－284	土師坏	11.5	4.1	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	横撫で。箆削り。		体部扁球形に内湾。	21
20	H－284	須恵坏蓋	(12.0)	2.6	①細粒②良好③灰白④1/3	轆轤。横撫で。天井部緩傾斜。内側に返し。		環状つまみ。	21
21	H－284	土師坏	12.3	3.4	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。	箆削り。	体部浅く安定した底。	21
22	H－284	土師坏	(12.1)	3.7	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	横撫で。箆削り。		口縁部で立ち上がる。	21
23	H－284	須恵坏	13.3	3.5	①細粒②良好③灰④2/3	外傾。轆轤。	箆起し。	底径大きい。	21
24	H－284	土師坏	(13.7)	4.4	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	直立。横撫で。箆削り。		底～体部緩く内湾。	21
25	H－284	須恵坏	(12.3)	3.5	①細粒②良好③灰④1/5	轆轤。横撫で。	回転箆削りか。	腰部で一旦折れ体部外傾して開く。	21
26	H－284	須恵薬壺蓋	(14.2)	4.5	①細粒②良好③灰④口縁～底部の一部	轆轤。横撫で。	回転撫で。	天井端部小さい三角形。鍔水平に張り出す。	21
27	H－285	土師質坏	－	－	①細粒②良好③橙④底部3/4	外傾。轆轤か。横撫で。	手持ち箆削り。	底径大きく体部浅い。	21
28	H－288	土師坏	11.5	3.5	①細粒②良好③橙④1/2	端部直立。横撫で。		体部緩く内湾。	21
29	H－289	須恵鉢	－	－	①細粒②良好③褐灰④1/2	轆轤。横撫で。	回転糸切り後撫で調整。	体部丸み。高台短い三角形。	21
30	H－289	須恵坏	－	－	①細粒②良好③灰白④口縁～底部破片	外傾。轆轤。	腰部～底部にかけ箆削り。	体部丸み。平底か。	21
31	H－289	須恵坏蓋	(17.0)	3.7	①細粒②良好③褐灰④1/3	天井部～体部にかけ箆削り。口縁部内側にシャープな返し。		擬宝珠形のつまみ。	21
32	H－289	須恵坏蓋	－	－	①細粒②良好③褐灰④1/5	天井部回転箆削り。底部緩湾曲か。		天井部平坦。	21
33	H－289	須恵長頸壺	－	－	①細粒②良好③灰白④脚部のみ	脚部回転撫で。中位に断面三角形状の凸帯廻る。			21
34	H－289	土師甕	－	－	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	横位の箆削り。	箆削り。	底部幅広の平底。	21
35	H－289	土師坏	16.0	5.0	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。箆削り。		大振り。体部内湾。	22
36	H－289	土師坏	(12.6)	－	①細粒②良好③橙④1/4	直立。横撫で。箆削り。		体部緩く内湾。	22
37	H－289	土師甕	25.0	33.5	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。箆削り。	箆削り。	口縁部に最大径。	21
38	H－289	須恵坏蓋	10.6	[3.5]	①細粒②良好③灰白④4/5	天井部回転箆削り。横撫で。内側に返し。		乳頭状のつまみか。	22
39	H－289	土師坏	10.0	3.2	①細粒②良好③橙④完形	内傾。横撫で。箆削り。		小形。体部緩く湾曲。	22
40	H－289	土師盤	17.0	3.7	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。箆削り。		体部浅く偏平。	22
41	H－289	土師甕	(22.0)	(30.7)	①細粒②良好③橙④1/3	外反。横撫で。箆削り。	箆削り。	短胴形。胴部若干膨らむ。	22
42	H－289	土師坏	12.2	4.1	①細粒②良好③橙④3/4	端部内傾。轆轤。		小形。体部内湾。	22
43	H－289	須恵鉢	(13.9)	4.1	①細粒②良好③灰④1/3	轆轤。横撫で。	回転箆削り。	底外周に削出し高台。	22
44	H－289	須恵坏	13.9	4.1	①細粒②良好③灰白④2/3	轆轤。横撫で。	手持ち箆削り。	中位膨らみ底径大きい。	22
45	H－289	須恵鉢	18.1	4.1	①細粒②良好③橙④1/3	轆轤。横撫で。	箆削り。	口縁ハの字状に開く。	22

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	Fig
46	H－289	土師坏	10.8	3.2	①細粒②良好③橙④4/5	内径。横撫で。篦削り。		小形。体部内湾。	22
47	H－289	土師坏	13.0	4.0	①細粒②良好③橙④4/5	直立。横撫で。		体部緩く内湾。	22
48	H－289	土師盤	17.8	3.7	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	横撫で。篦削り。		体部浅く偏平。	22
49	H－289	土師盤	17.4	3.6	①細粒②良好③橙④1/4	横撫で。篦削り。		体部浅く偏平。	22
50	H－289	土師坏	10.8	2.9	①細粒②良好③橙④1/2	端部直立。横撫で。		小形。体部浅く内湾。	22
51	H－289	土師坏	(11.0)	3.0	①細粒②良好③橙④1/2	端部内傾。横撫で。		体部緩く内湾。	23
52	H－289	カワラケ	12.2	3.3	①中粒②不良③灰白④3/4	轆轤。横撫で。	回転糸切り。	上半強いハの字状。	23
53	H－289	土師甕	22.5	34.5	①細粒②良好③にぶい橙④完形	外傾。篦削り。	篦削り。	胴部にやや丸み。口縁部に最大径。	22
54	H－289	土師坏	10.8	3.1	①細粒②良好③橙④1/2	端部内傾。横撫で。		小形。体部緩く内湾。	23
55	H－290	土師台付甕	10.4	13.0	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	脚部横撫で。	胴上半に最大径。	22
56	H－290	須恵椀	11.0	5.0	①細粒②良好③灰白④ほぼ完形	轆轤。横撫で。	回転糸切り後撫で調整。	体部直線的に立ち上がる。	23
57	H－290	須恵坏	12.2	3.3	①細粒②良好③灰白④完形	轆轤。横撫で。	右回転糸きり。	体部浅く底径大きい。	23
58	H－290	須恵坏	12.0	4.4	①細粒②良好③灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。強い横撫で。	右回転糸きり。	体部深い。	23
59	H－290	土師甕	－	－	①粗粒②良好③橙④破片	外反。横撫で。篦削り。	煮こぼれ状付着物。	肩部に最大径。	23
60	H－290	須恵坏	(12.3)	4.2	①細粒②良好③灰④1/2	轆轤。横撫で。	右回転糸きり。	体部やや強く膨らみぎみに立ち上がる。	23
61	H－291	土師坏	(10.4)	3.3	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。篦削り。			23
62	H－291	土師坏	12.2	4.4	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。		口縁部変換点に稜。	23
63	H－291	土師坏	(12.2)	4.6	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外傾。横撫で。篦削り。		口縁部変換点に稜。	23
64	H－291	土師坏	(12.0)	4.1	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	端部直立。横撫で。		体部内湾。	23
65	H－291	土師坏	(12.1)(	4.4)	①中粒②良好③にぶい橙④1/4	直立。横撫で。篦削り。		口縁部変換点に稜。	23
66	H－291	土師坏	12.6	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	端部直立。横撫で。		体部緩く内湾。	23
67	H－291	土師甕	(21.0)	(25.7)	①中粒②不良③橙④1/4	外反。横撫で。		長胴形。やや下半部膨らみをもつ。	23
68	H－291	須恵甕	(27.6)	3.3	①細粒②良好③灰白④1/5	轆轤。		底部丸底。胴下半内湾気味。	23
69	X31,Y25	土師鉢	(17.6)	－	①細粒②良好③橙④口縁・胴部	横撫で。篦削り。		口縁部変換点でわずかに稜。	23
70	A区表採	羽釜	－	－	①細粒②良好③橙④破片	轆轤。横撫で。		水平の鍔。	23
71	B区表採	須恵坏蓋	－	－	①細粒②良好③灰④1/6	轆轤。横撫で。		天井部やや偏平。	23
72	B区表採	須恵壺？	－	－	①細粒②良好③灰黄④口縁部	横撫で。頸部に刷毛目状工具痕。			23
73	B区表採	須恵坏	(13.3)	4.3	①中粒②良好③明オリーブ灰④1/2	外傾。轆轤。横撫で。	篦起し。	腰部丸い。	23
74	B区表採	須恵椀	(16.3)	7.1	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/4	外傾。轆轤。横撫で。	回転撫で調整。	高台高くハの字にふんばる。	23
75	X37,Y24	土師坏	9.8	3.0	①細粒②良好③橙④1/2	内傾。横撫で。篦削り。		体部緩く内湾。	23

注）表の記載は以下の基準で行った。
① 胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とした。
② 焼成は、極良・良好・不良の三段階。
③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原 1976）によった。
④ 大きさの単位はcmであり、現存値を［ ］、復元値を（ ）で示した。

Tab. 2 石器・石製品観察表

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	H－279	有孔板	[2.7]	[4.1]	0.8	14.8	滑石	穿孔あり。
2	H－287	有孔板	[2.7]	[1.4]	0.7	3.4	滑石	穿孔あり。
3	H－287	臼玉	－	0.6	0.4	0.2	滑石	
4	H－286	臼玉	－	0.7	0.6	0.4	滑石	
5	H－279	石鏃	[1.9]	[2.0]	0.4	1.4	黒色安山岩	凹基無茎鏃。右基部、先端部欠損。
6	H－281	剥片	1.9	1.5	0.5	0.9	頁岩	
7	H－284	土錘	4.0	1.8	1.7	10.4	－	

注）表の記載で、大きさと重さについての単位はcmとｇである。［ ］は現存値。

Ⅵ　ま　と　め

はじめに

5年間にわたる大屋敷遺跡の発掘調査が終了した。平成4年度より8年度までの調査面積は、9,465㎡におよぶ。これまでに本遺跡では、古墳時代の居館址に関連すると思われる大型の高坏(注1)、高崎市綿貫観音山古墳出土の有蓋台付壺と同一工人集団により製作されたと思われる台付長頸壺(注2)、夥しい数の石製模造品、24個の透かし孔と台脚部上端に粘土粒を巡らせる圏足円面硯(注3)など注目すべき遺物が数多く出土している。また、規模の大きな事例としては県内2例目となる竈構築材採掘坑(注4)の発見など大きな成果をあげてきたといえる。

本遺跡は、時代的には縄文時代から中世にまで及んでいるが、その中心は古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居址群であり、検出された住居址は実に289軒を数える。そこで本章では検出された住居址を基に、本遺跡はどのような消長をたどってきたのかを検討してみたい。

大屋敷遺跡住居址群の変遷

(1) 縄文時代

縄文土器破片は総計2,241点出土しているものの、遺構として確認できたものはJ－1号住居址(注5)1軒のみである。しかし、遺物の出土状況をみるとY65のライン(注6)より南からの出土が多く、それより北側からは十数点のみである。特にY76から南側に集中する。調査区最南方部際を八幡川が流れていることとの関係が推測される。時代的には加曽利E式土器が多く、そのうち加曽利E4式がほとんどを占める(注7)。また、胴部に綾杉状の沈線を施し、意図的に底部を割り、内部に石棒を逆位におさめた祭祀的な遺構も検出されている。その他には、阿玉台式土器19点、称名寺Ⅰ式土器6点、晩期4点が出土している。これらのことから、縄文時代中期後半の生活の場が本遺跡の南側を中心に広がっていたと考えられる。

(2) 古墳～平安時代の時期別遺構分布

検出された住居址のうち、土器型式(注8)等からある程度年代の特定される住居址272軒について、以下の範疇(注9)により大屋敷遺跡における古代集落のあり方を検討することとしたい。また、出土遺物のうち、注目すべき遺物についても検討の対象とした。なお、限られた道水路の調査であるため一時点の集落を復原することは困難であり、また、2つの時期にまたがるような住居址も存在したが、便宜上いずれかの時期に組み込んである(注9)。

時期別	実　年　代	住居址数
1　期	5世紀後半～6世紀前半	63
2　期	6世紀中葉～7世紀前半	57
3　期	7世紀中葉～8世紀前半	73
4　期	8世紀中葉～9世紀前半	47
5　期	9世紀中葉～11世紀	32

・5年間にわたる調査で検出した住居数289軒
（最終番号は291であるがH－64・283号住居址は欠番となるため289軒となる。）
・H－33号住居址をはじめ17軒は時期不明。

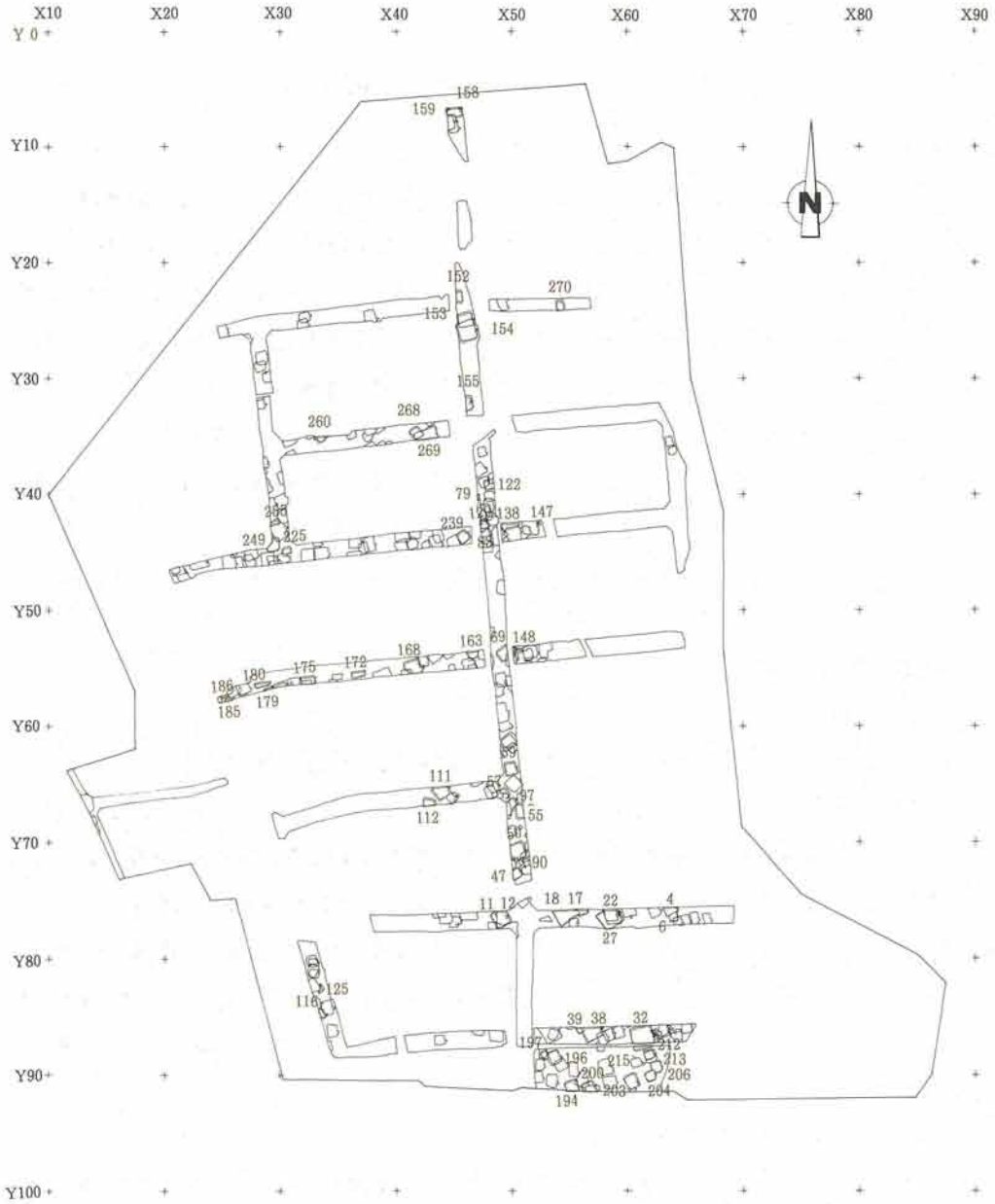


Fig. 6　時期別分布図１期

時期別分布図１期（５世紀後半～６世紀前半）［図１］

調査区の南東部・中央やや南寄り・北東部の３カ所にこの期の住居址群が分布する。４世紀後半のＨ－６号住居址(注10)を含む南東部は、比較的この期の中でも古い時期の住居址が多い。中央やや南寄り及び北東部の住居址群は６世紀前半の住居址が多い。そして、中央やや南寄りの住居址群に位置するＨ－12号・57号・97号住居址からは、それぞれ大型高坏、須恵器大型器台、大量の石製模造品や臼玉(注11)が出土しており、この期における大屋敷遺跡の中心があったのではないかと推測される。また、分布図からこの期の住居址群の特徴として、比較的大きな住居址とそれを取り巻く住居址により、一つの小住居址群が構成されていたとも考えられる。

Fig. 7　時期別分布図２期

時期別分布図２期（６世紀中～７世紀前半）［図２］

前期の３カ所の住居址群を結びつけるような位置に、この期の住居址が新たに派生している。Ｈ－57号・97号住居址のすぐ北東に位置するＨ－58号住居址からは台付長頸壺が出土しており、調査区中央やや南寄りの住居址群が依然として大屋敷遺跡の中心であったと考えられる。

しかし、前期の住居址が３軒ほどであった調査区北西部や南西部に新しく住居址群が出現してきており、大屋敷遺跡全体としての範囲が広がっていったことがうかがえる。また、前期のように大きな住居址とそれを取り巻くような住居址により一つの小住居址群を構成するといった特徴は特にみられなくなっており、社会変化が想像される。

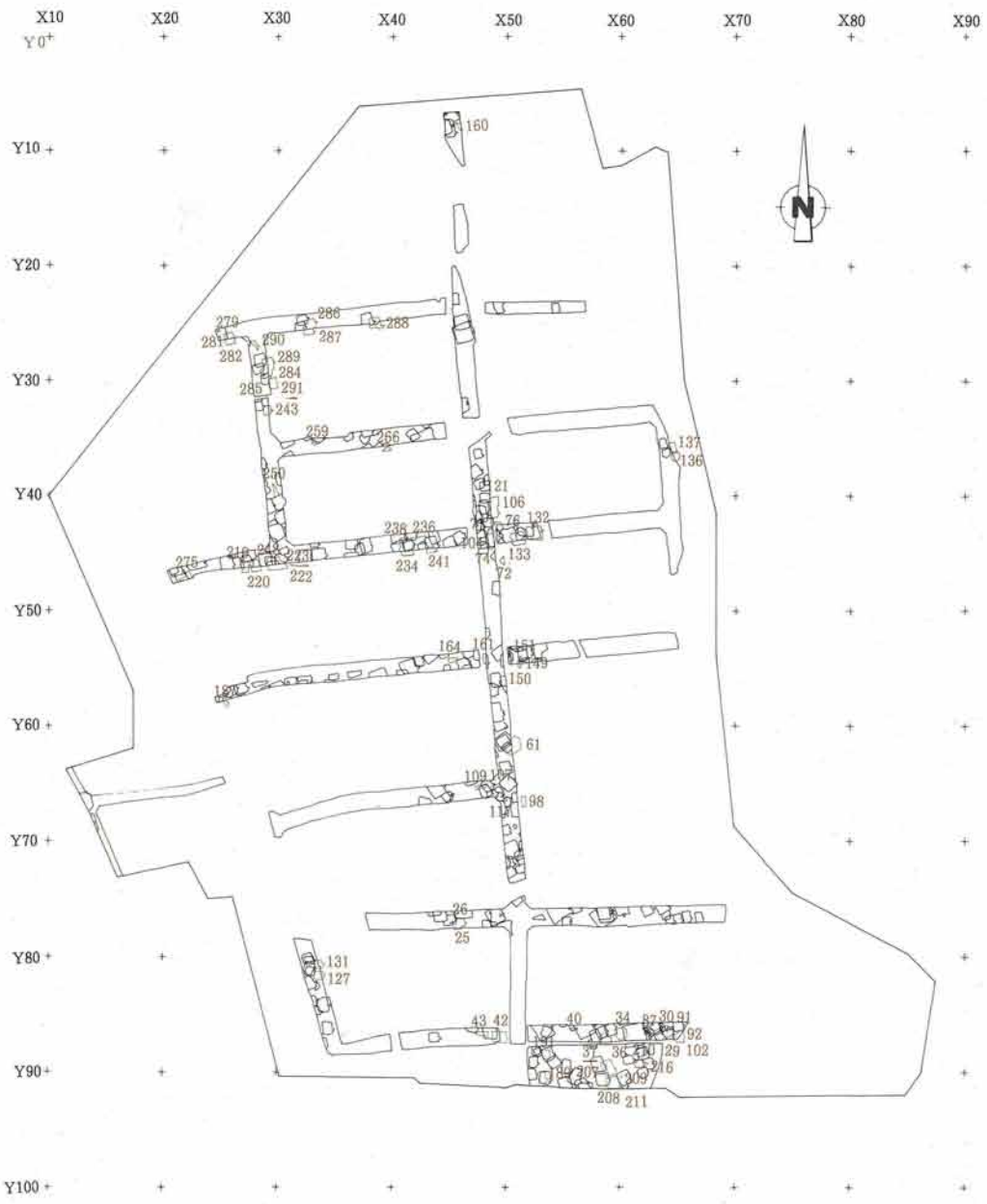


Fig. 8　時期別分布図３期

時期別分布図３期（７世紀中～８世紀前半）［図３］

大きな変化として調査区南西部を除き、ほぼ調査区全域でこの期の住居址がみられる。特に調査区中央やや北よりの地域と最南方部に住居址群のかたまりがみられる。また、新たに調査区北東部と北西部にこの期の住居址が出現している。それまで長く大屋敷遺跡の中心は調査区中央やや南寄りであったが、奈良時代に向かい調査区中央やや北よりに中心が移動したのであろうか。

分布図でははっきりしないが、個々の住居址をみると、その大きさは一辺が約４ｍ前後とほぼ均一化され、竈の位置も東辺南寄りが中心となり、主軸の方向はＮ－70°～95°－Ｅの範囲に集中する。検出された住居址数が最も多い時期でもある。

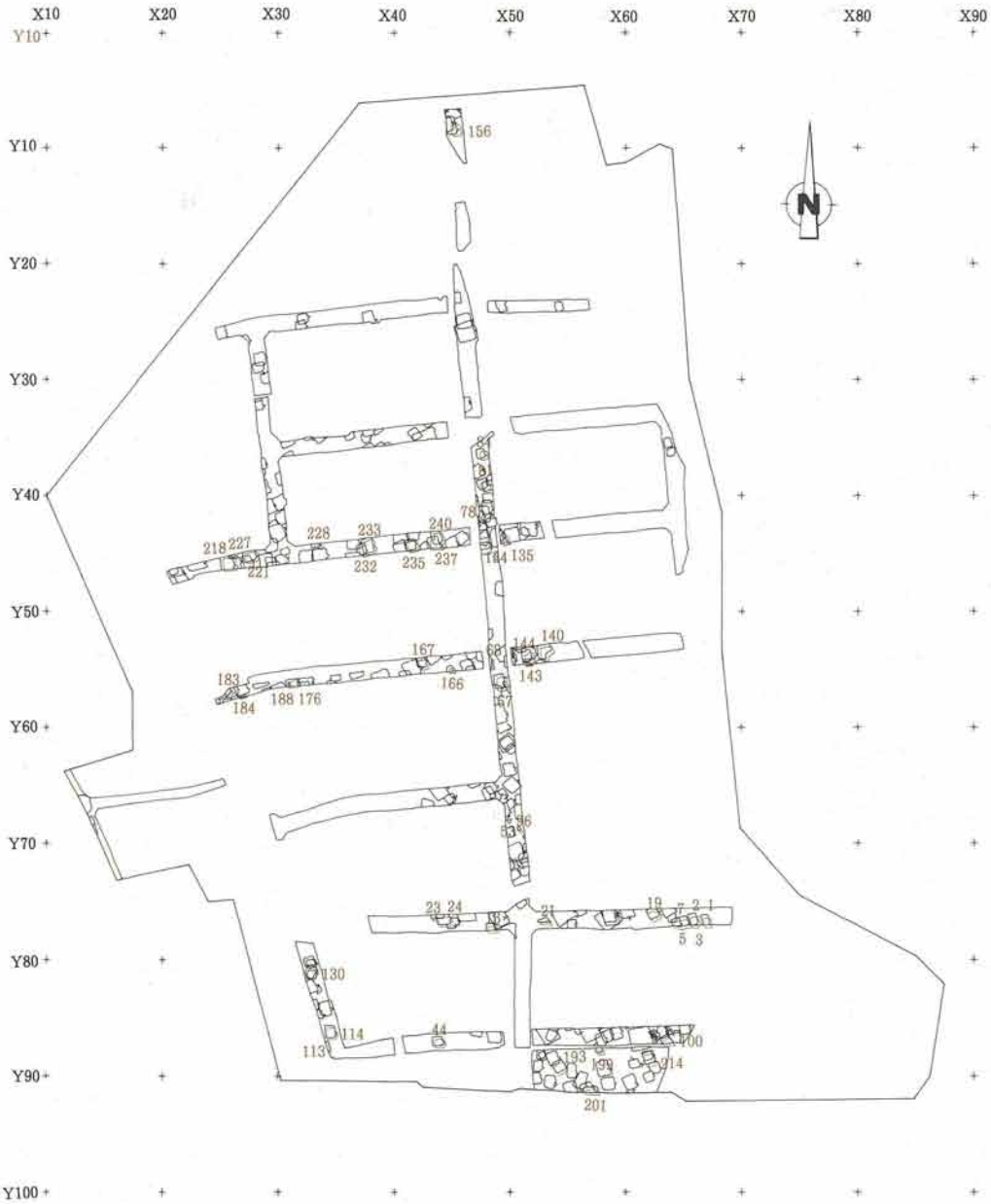


Fig. 9　時期別分布図４期

時期別分布図４期（８世紀中～９世紀前半）［図４］

前期の中心であった調査区中央やや北よりの地域と調査区南東及び南西の地域にこの期の住居址が多く見られる。調査区中央やや北よりの住居址群をみると、Ｈ－221号住居址からは金銅製鈸具が(注12)、Ｈ－237号住居址からは極端に陸部の小さい円面硯が出土している。また、蹄脚硯の影響を強く受けていると思われる造りの立派な円面硯もＨ－221号住居址付近で出土しており、ある階級の人々の存在が想像される。住居址の数からみると前期までに較べかなり減っているが、時期を決定できずに不明とした住居址の中には、この期に入る可能性をもつ住居址が多く含まれることから、この期になり大屋敷遺跡が衰退していったとは言い切れない。

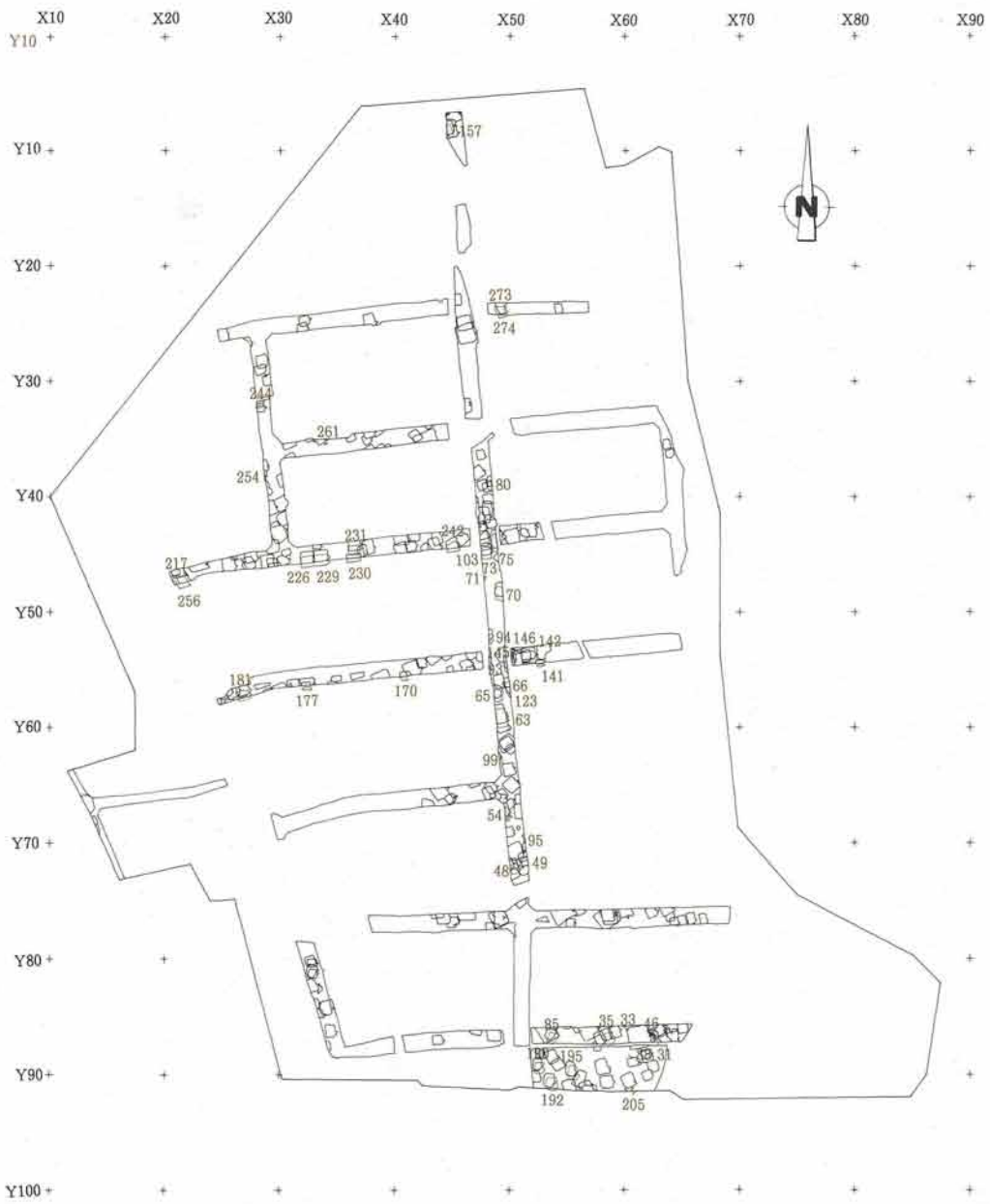


Fig. 10　時期別分布図５期

時期別分布図５期（９世紀中～11世紀）［図５］

ほぼ前期と同じように調査区中央やや北寄りの地域と南東部及びこの二つの地域を南北に結ぶ位置に住居址が分布する。調査区中央やや北寄りの地域より更に北側や調査区南西部には、この期になって造られたと思われる住居址はほとんど検出されていない。また、新たな住居址の数を較べてみてもかなり減ってきていることから、大屋敷遺跡全体としてもやや衰退期にさしかかったのではないかと考えられる。以上、大屋敷遺跡の消長を概観してきたが、なにぶんにもごく限られた調査範囲での概観であり十分とはいえない。しかし、古墳～奈良・平安時代にかけ、この地に多くの人々が生き、さまざまな活動を行っていたことは確かである。

（注１）　Ｈ－12号住居址出土。復元値で口径30.6cmを測る大型の高坏。『大屋敷遺跡Ⅰ』参照。

（注２）　Ｈ－58号住居址出土。口径11.4cm、復元値で高さ45.2cm、底径20.0cm。『大屋敷遺跡Ⅱ』参照。

（注３）　平成７年度調査のＢ区西側で出土。そのほかＨ－226・237号住居址等から４点の円面硯が出土している。『大屋敷遺跡Ⅳ』参照。

（注４）　規模の大きな事例としては鳥羽遺跡に続き県内で２例目となる。『大屋敷遺跡Ⅲ』参照。

（注５）　平成７年度調査のＡ区中央で検出。Ｊ－１の西側では石棒を逆位におさめた埋設土器も検出された。『大屋敷遺跡Ⅳ』参照。

（注６）　グリッド設定図（本書５頁）参照。

（注７）　下表縄文土器一覧表参照。

（注８）　『群馬文化　第208号』坂口　一「古墳時代後期の土器の編年」群馬県地域文化振興会（1986）、『群馬県史研究　第24号』坂口　一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」群馬県史編纂委員会（1986）を参考とした。

（注９）　古墳時代～奈良・平安時代のおおまかな集落変遷の特徴を掴むことを主眼とし、１～５期の区別とした。また、住居址の時代が２つの時期にまたがるものは、原則として古い区分に組込んだ。

（注10）　Ｈ－６号住居址はX63・64、Y76グリット。石田川土器が検出されている。『大屋敷遺跡Ⅰ』参照。

（注11）　Ｈ－97号住居址からは、石製模造品32点・臼玉131点が出土している。また、破損が著しいため高坏の脚部で個体数をみると16個体以上が出土する等、祭祀に深く係わりのある住居址と考えられる。『大屋敷遺跡Ⅱ』参照。

（注12）　Ｈ－221号住居址から出土。本書付編参照。なお、Ｈ－213号住居址出土の飾り金具についても大屋敷遺跡Ⅵで扱えなかったため、PL. ８に写真掲載した。

分類		点数	割合
曽利式			0.04
中期前半	阿玉台式	19	0.8
中期後半	加曽利Ｅ式	1,972	87.9
	沈線＋縄文	529	26.8
	微隆起＋縄文	88	4.5
	沈線	268	13.6
	微隆起	67	3.4
	条線	67	3.4
	隆帯	90	4.6
	隆帯＋縄文	60	3.0
	隆帯＋刺突	2	0.1
	刺突	10	0.5
	円形刺突	11	0.5
	縄	362	18.4
	無文	416	21.1
	把手・突起	2	0.1
称名寺		6	0.3
底部		9	0.4
不明		230	10.3
縄文晩期		4	
合計		2,241	99.94

Tab. ３　縄文土器一覧

《参考文献》

『大屋敷遺跡Ⅰ～Ⅳ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1993他

『前橋市史　第１巻』前橋市　1971

『群馬県史　資料編１　原始古代１』群馬県　1988

『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988

Ⅶ 付　　編

大屋敷遺跡出土金銅製鉸具について

平　方　篤　行

金銅製鉸具は、H－221 号住居址から出土している。当初は破損が甚だしく、また鋲孔があることから金銅製丸鞆と考えたが、新たに付属する小片が確認され、1つの銅板を曲げて何かを挟み込む形状が復元され、馬具等の釣金具とも見られたが、2片の双方の中央に切れ込みがあり、それが帯をとめる際の鉄刺（さすが）を通す孔と考えられ、そこから鉸具であると確認された。

また、鉄刺やその他の部分は出土していない。裏面には銅イオンの作用により、黒漆状のものが残存する。極めて薄い金銅板で造られ、法量は実測図に示す通りである。

全国各地の遺跡からの石製の丸鞆・巡方の出土は極めて多く、集落遺跡からの出土が大多数となるが、金銅製丸鞆・巡方や鉸具の検出例は全国で18例ほどが確認されている。群馬県内の各遺跡を概観すると、やはり石製の丸鞆・巡方がほとんどであり、集落遺跡の出土が多い。群馬県内では金銅製腰帯の飾り具の出土例は4例で、前橋市清里南部遺跡、吉岡町清里陣場遺跡等が知られるが、金銅製鉸具は県内初めての出土である。金銅製鉸具の出土例は、関東地方では千葉県村上遺跡、同大道遺跡のみで、全国でも3例ほどで、全国的にみても出土例が少なく貴重な類例である。金銅製丸鞆・巡方や鉸具、石製の丸鞆・巡方はともに腰帯につけられた帯の金具である。石製、金銅製ともに一具揃っての出土は少なく、集落遺跡では丸鞆・巡方のいずれか1点ずつの出土の例が多く、特別な補修工房からの出土以外には一具揃っての出土は皆無である。

さて、大屋敷遺跡出土の鉸具であるが、伴出する遺物は平安時代9世紀前半頃ものと考えられる。金銅製鉸具は、腰帯につけられた帯を留める金具である。前述のように、腰帯には、丸鞆・巡方やだ尾等の飾り具がつけられて一具となるものである。洋の東西を問わずに、古代社会にあっては、服装および装身具は身につける人の属する集団（聖俗や身分制）を表すが、この腰帯は、律令国家にあって公の場に臨むときの朝服・制服に必要な装束である。朝服は、身分により律令により規定されるものであった。そして、腰帯が使用されたのは、ほぼ奈良時代を通じてと、9世紀初頭の律令再編成期に限定され、律令国家内で身分を識別する象徴として用いられたことは明らかである。衣服令に定められる腰帯は、使用されている時期が限定されるが、腰帯はやがて石帯として平安時代を通じて男装の装束として用いられていく。また、集落遺跡内から一具揃って出土することが極めて稀であることから、ある時期に一具のものが分けられたか、丸鞆・巡方を含め一具揃っていなくとも使用されていたことも考えられる。

服装や装身具が律令に厳密に規定され、その使用も規定されていたことから、この金銅製鉸具を考えると、金銅製ということを考えねばならない。衣服令をみると金銀装の腰帯は、五位以上、衛府督・佐、兵衛督・佐と限定されている。しかし、群馬県内出土の金銅製丸鞆・巡方を含め、大屋敷遺跡出土の鉸具をこの衣服令の規定に直接あてはめることは困難である。群馬県内出土の

金銅製丸鞆はすべて腰帯の裏金具である。伝世品を含めて腰帯には、石製丸鞆・巡方を留める金銅製裏金具の類例があり、この裏金具と鉸具が衣服令に規定されていたか否かの問題があるからである。衣服令の規定から逸脱する腰帯の飾り具からは、律令国家が解体していく中で、本来厳密であるべき律令制度が緩慢に変遷している様がみてとれるとも考えられる。

群馬県内出土の金銅製丸鞆のうち、前橋市清里南部遺跡と吉岡町清里・陣場遺跡と大屋敷遺跡とは地理的にも近い位置にある。腰帯は、朝服・制服を着用する際に必要なものである。律令国家が全国の末端にまで行政を推し進めていくが、地方においてその拠点となるのは国府や郡衙である。一概にはできないが、金銅製丸鞆や鉸具が出土した遺跡が地理的に近く、また、上野国の国府に近いことから首肯できるのではないだろうか。また、腰帯がこの大屋敷遺跡出土の鉸具を含め一具揃った出土が少ないことは、律令国家が変遷していく中で、腰帯の必要性、言い換えるなら律令国家の末端に組み込まれていくことの意味が、薄れたことを示しているのではないだろうか。

以上。繁雑に述べてきたが要約すると、大屋敷遺跡出土の鉸具は、群馬県内初めての出土であり、全国的にみても類例の少ないものであること、腰帯は衣服令に規定されるもので、この大屋敷遺跡出土の鉸具は、その規定にあてはめることは困難であるが、それにより律令国家の末端に組み込まれた人々の姿が見てとれるものであることの2点である。

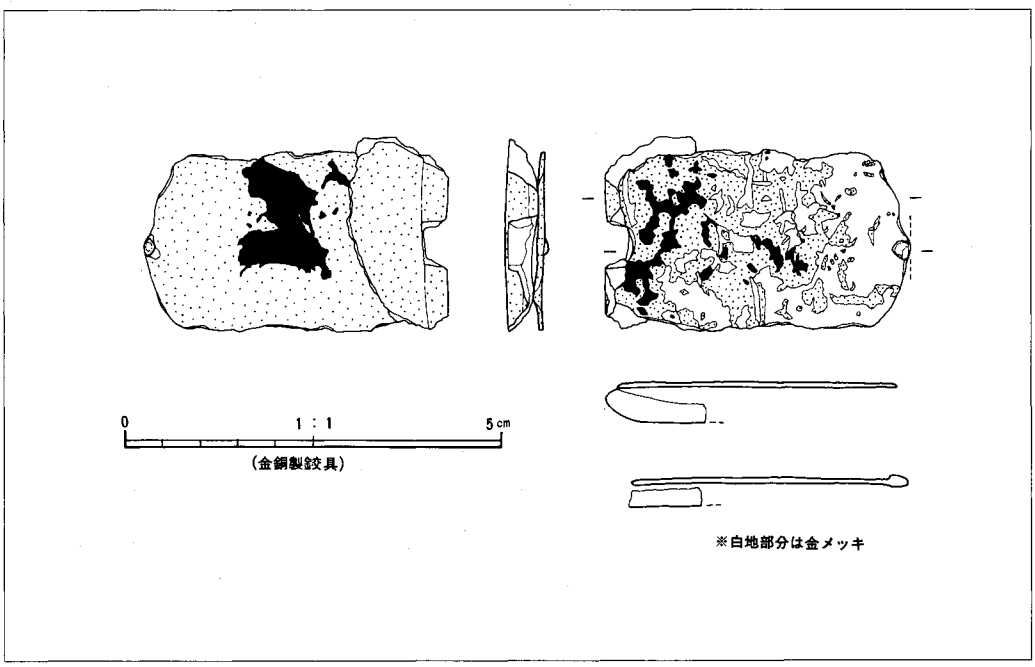


Fig. 11　金銅製鉸具実測図

《参考文献》

阿部　義平	「帯と官位制について」	『東北考古学の諸問題』	1976
田中　宏明	「官衙及び関連遺跡と腰帯」	『地方官衙とその周辺』	1995

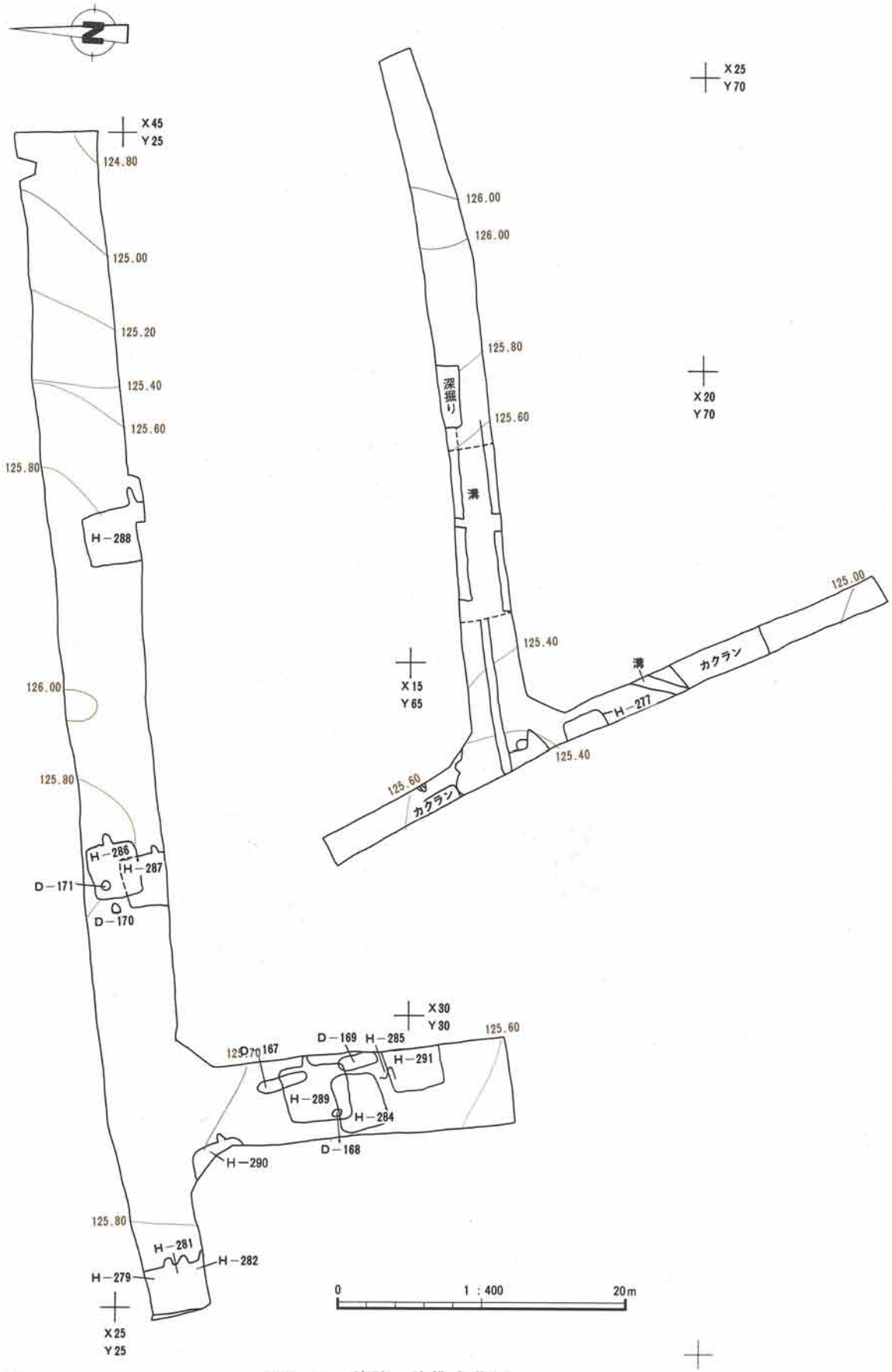
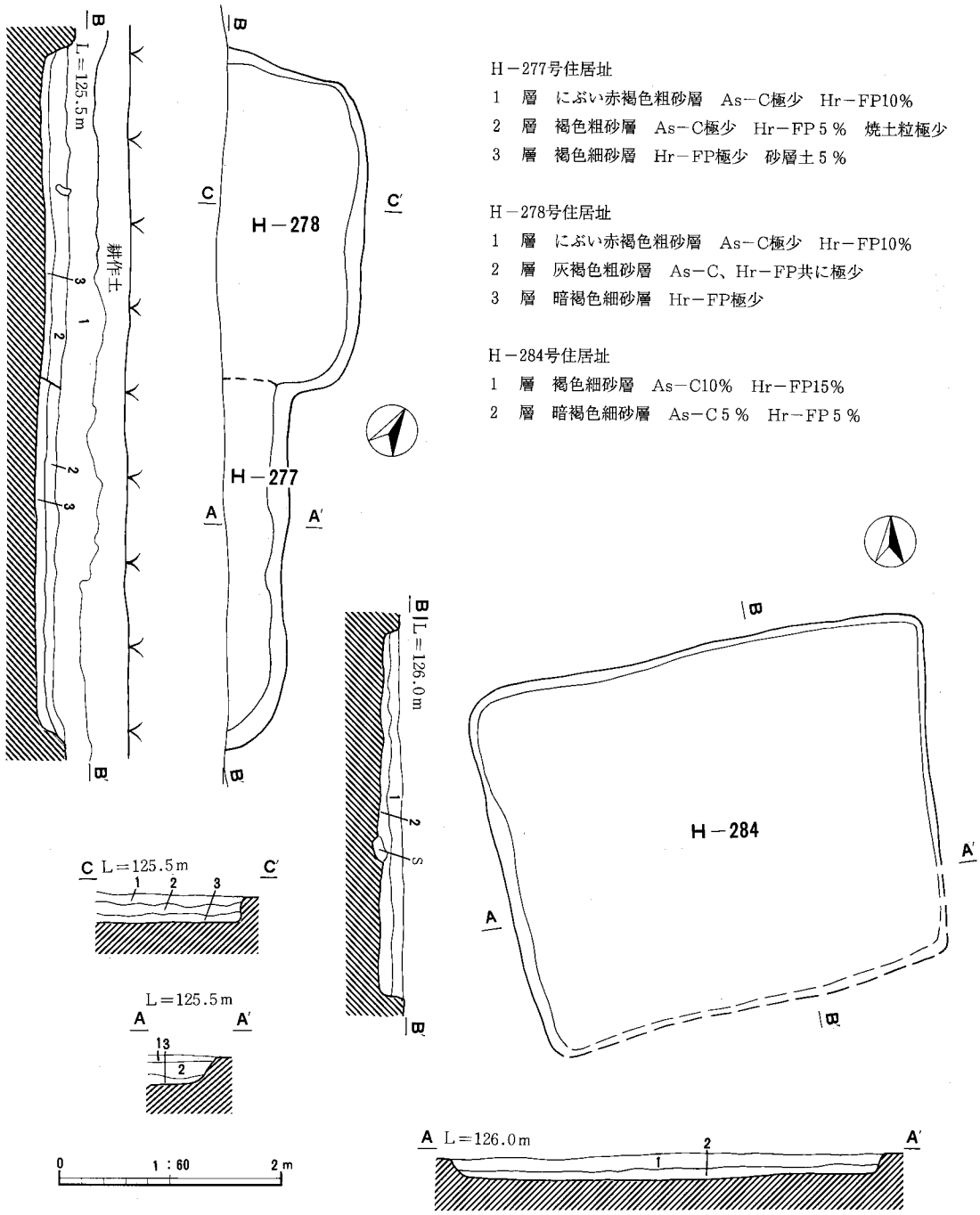


Fig. 12　遺跡・遺構全体図



H－277号住居址

1　層　にぶい赤褐色粗砂層　As－C極少　Hr－FP10%

2　層　褐色粗砂層　As－C極少　Hr－FP５％　焼土粒極少

3　層　褐色細砂層　Hr－FP極少　砂層土５％

H－278号住居址

1　層　にぶい赤褐色粗砂層　As－C極少　Hr－FP10%

2　層　灰褐色粗砂層　As－C、Hr－FP共に極少

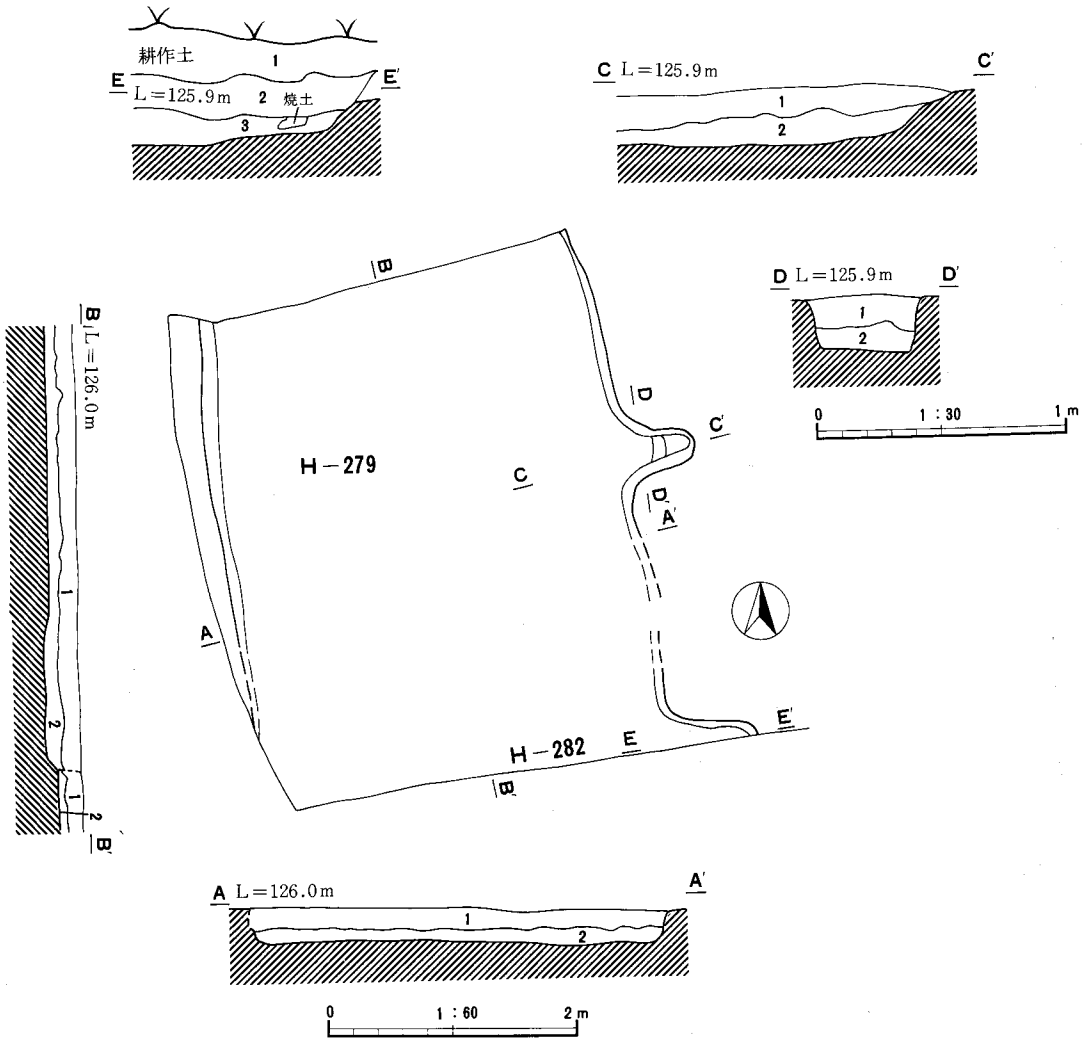
3　層　暗褐色細砂層　Hr－FP極少

H－284号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C10%　Hr－FP15%

2　層　暗褐色細砂層　As－C５％　Hr－FP５％

Fig. 13　H－277・278, 284号住居址



H－279·282号住居址

1 層 褐色細砂層 As－C10% Hr－FP10%

2 層 暗褐色細砂層 As－C５% Hr－FP５%

H－279号住居址竈

1 層 暗褐色粗砂層 As－C10% Hr－FP10%

2 層 極暗褐色細砂層 As－C５% Hr－FP５% 焼土粒５%

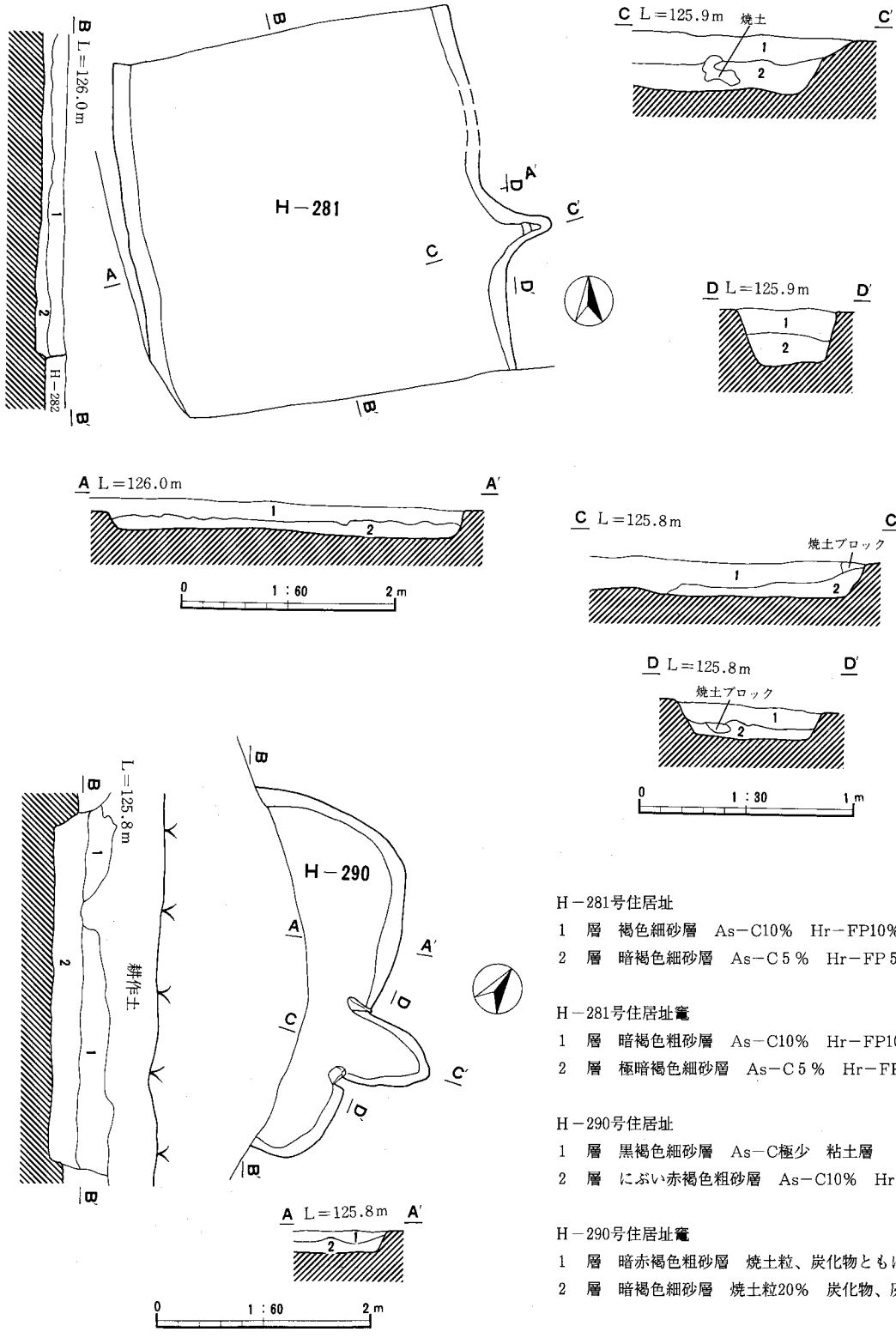
H－282号住居址竈

1 層 褐色粗砂層 As－C５% Hr－FP10% 焼土粒極少

2 層 暗褐色細砂層 As－C10% Hr－FP５% 焼土粒10%

3 層 暗褐色細砂層 As－C、Hr－FPともに極少 焼土粒10%

Fig. 14 H－279・282, 280号住居址



H－281号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C10%　Hr－FP10%

2　層　暗褐色細砂層　As－C５%　Hr－FP５%

H－281号住居址竈

1　層　暗褐色粗砂層　As－C10%　Hr－FP10%　焼土粒10%

2　層　極暗褐色細砂層　As－C５%　Hr－FP10%　焼土粒10%

H－290号住居址

1　層　黒褐色細砂層　As－C極少　粘土層

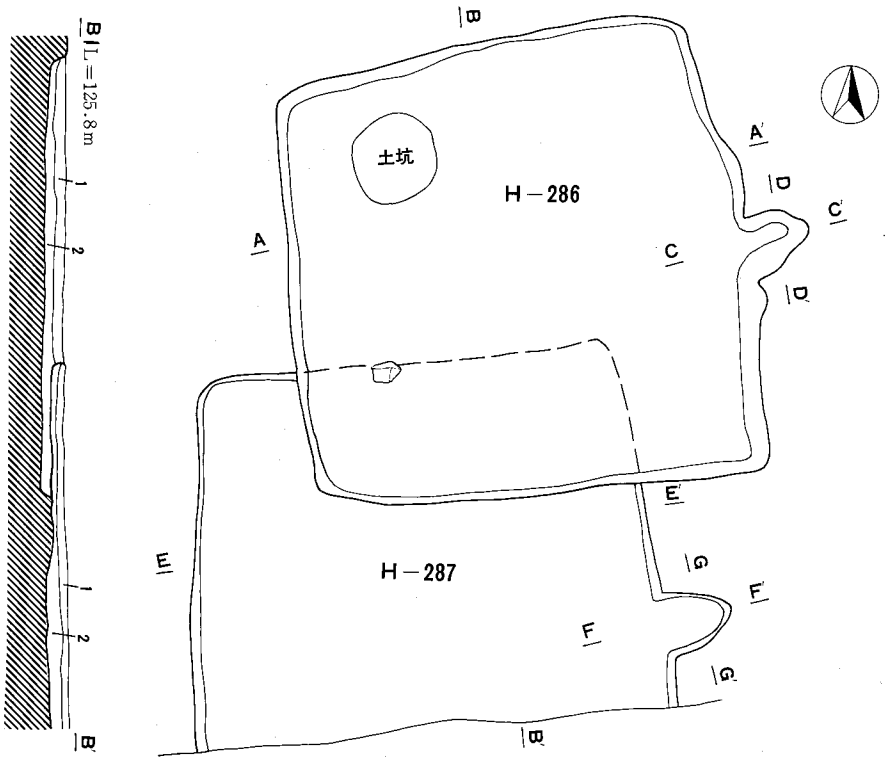
2　層　にぶい赤褐色粗砂層　As－C10%　Hr－FP５%

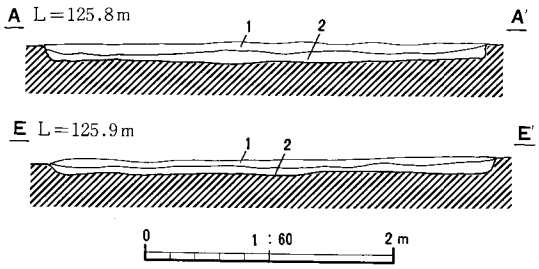
H－290号住居址竈

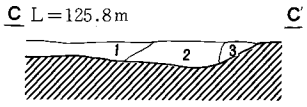
1　層　暗赤褐色粗砂層　焼土粒、炭化物ともに極少

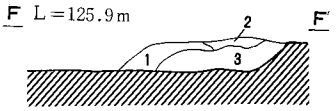
2　層　暗褐色細砂層　焼土粒20%　炭化物、灰ともに極少

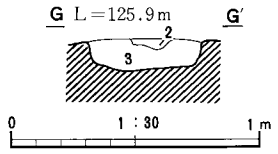
Fig. 15　H－281，290号住居址











H－286号住居址

1　層　暗褐色細砂層　As－C５％　Hr－FP極少

2　層　黒褐色細砂層　As－C極少　砂層ブロック５％

H－286号住居址竈

1　層　暗褐色粗砂層　As－C５％　焼土粒極少

2　層　暗赤褐色粗砂層　As－C、焼土粒、炭化物ともに極少

3　層　暗赤褐色粗砂層　焼土粒20％　炭化物極少

4　層　灰褐色細砂層　灰と粘土の混じり　焼土粒極少

H－287号住居址

1　層　褐色粗砂層　As－C５％　Hr－FP極少

2　層　暗褐色粗砂層　As－C、炭化物ともに極少

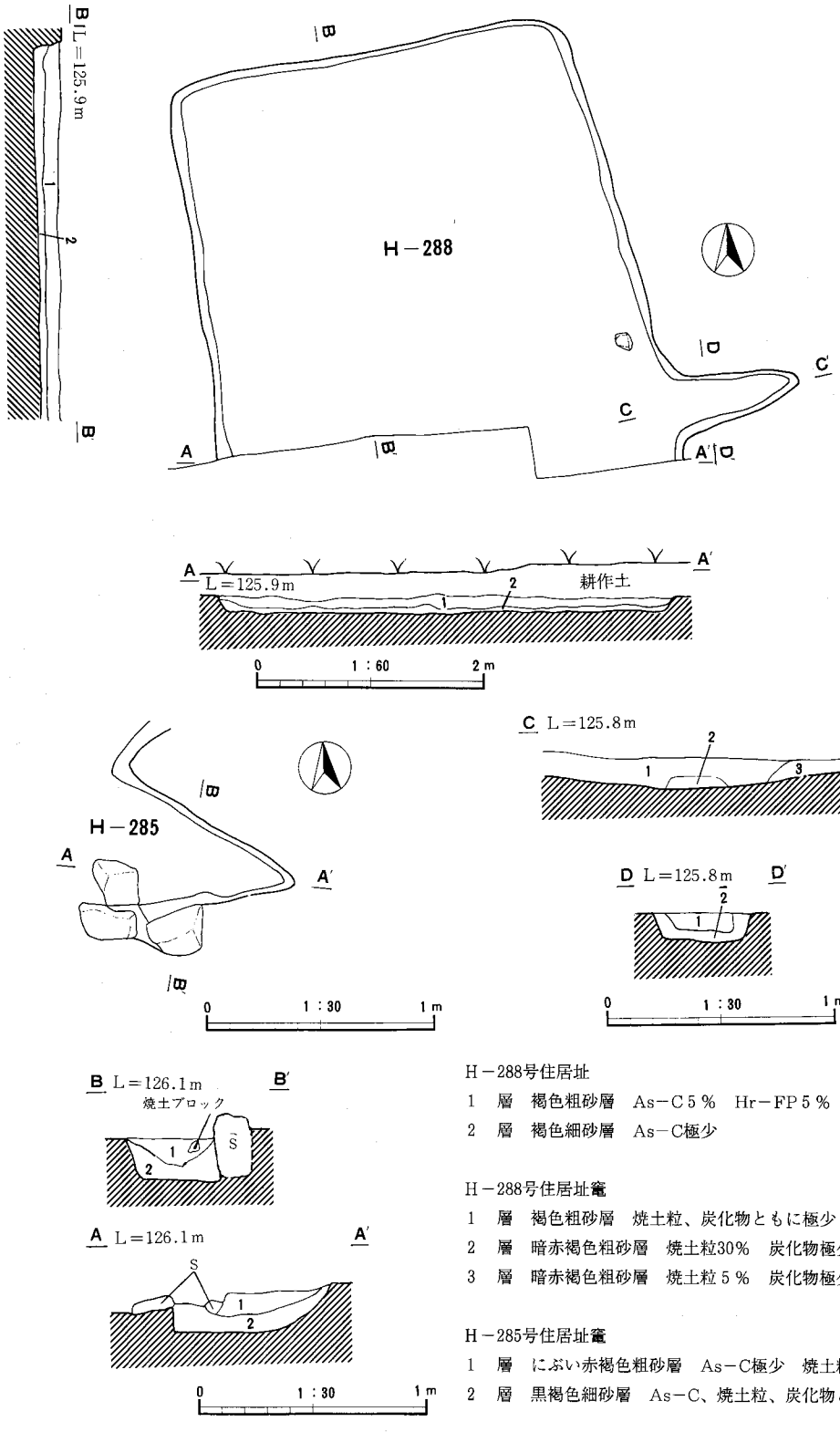
H－287号住居址竈

1　層　褐色粗砂層　As－C、Hr－FPともに極少

2　層　暗赤褐色粗砂層　焼土粒30％　　炭化物20％

3　層　灰褐色粗砂層　焼土粒、炭化物ともに極少

Fig. 16　H－286・287号住居址



H－288号住居址

1　層　褐色粗砂層　As－C５％　Hr－FP５％

2　層　褐色細砂層　As－C極少

H－288号住居址竈

1　層　褐色粗砂層　焼土粒、炭化物ともに極少

2　層　暗赤褐色粗砂層　焼土粒30％　炭化物極少

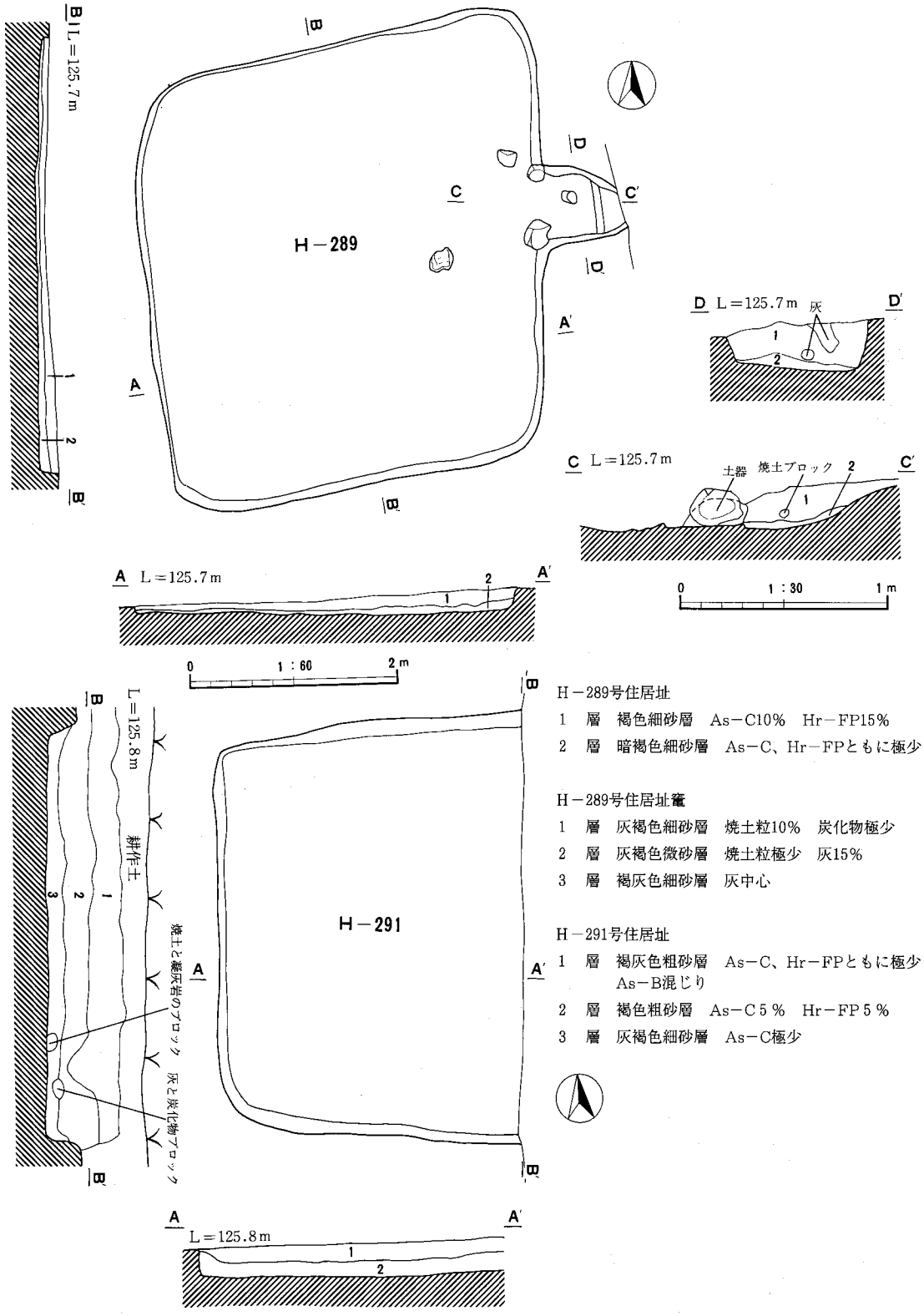
3　層　暗赤褐色粗砂層　焼土粒５％　炭化物極少

H－285号住居址竈

1　層　にぶい赤褐色粗砂層　As－C極少　焼土粒５％　炭化物極少

2　層　黒褐色細砂層　As－C、焼土粒、炭化物ともに極少

Fig. 17　H－285，288号住居址



H－289号住居址

1 層 褐色細砂層 As－C10% Hr－FP15%

2 層 暗褐色細砂層 As－C、Hr－FPともに極少

H－289号住居址竈

1 層 灰褐色細砂層 焼土粒10% 炭化物極少

2 層 灰褐色微砂層 焼土粒極少 灰15%

3 層 褐灰色細砂層 灰中心

H－291号住居址

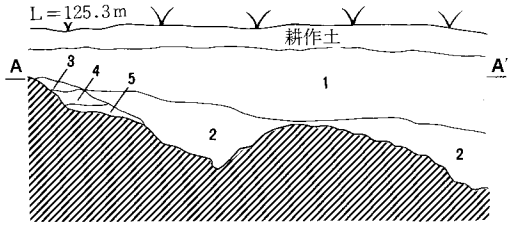
1 層 褐灰色粗砂層 As－C、Hr－FPともに極少
As－B混じり

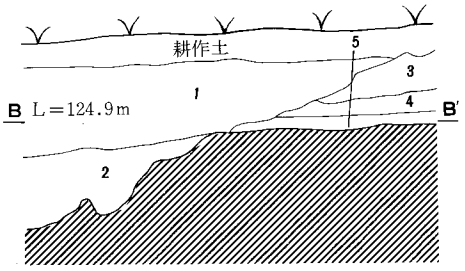
2 層 褐色粗砂層 As－C5% Hr－FP5%

3 層 灰褐色細砂層 As－C極少

Fig. 18 H－289, 291号住居址

W－14





W－14

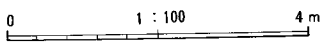
1　層　灰褐色粗砂層　褐色土主体　砂20％　5㎜～20㎜大の石を20％含む

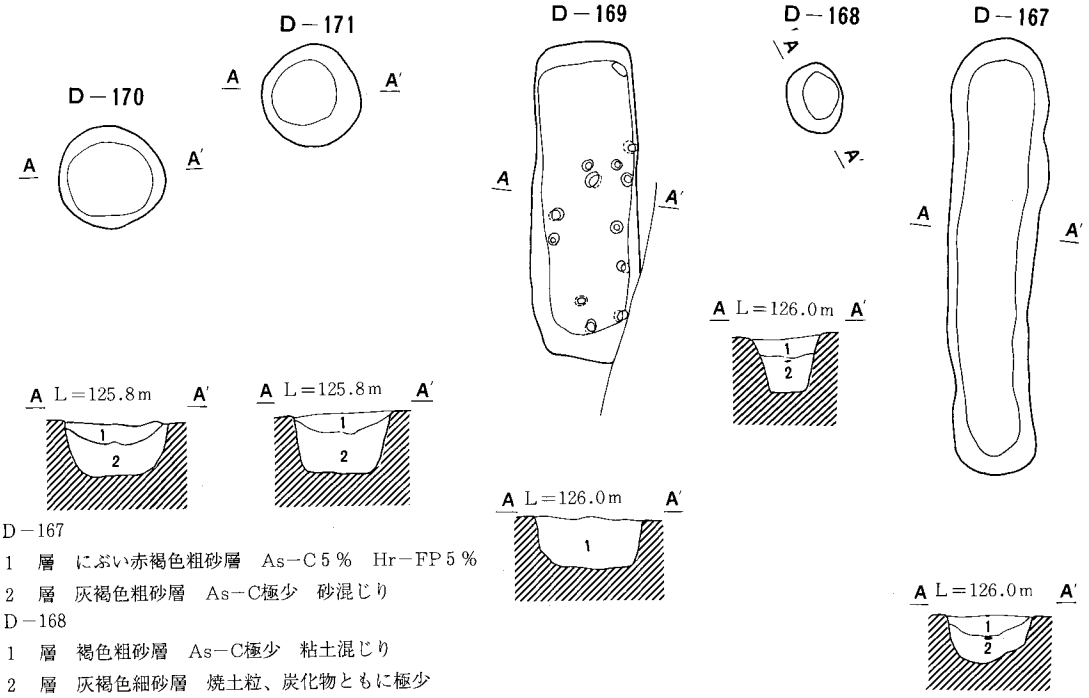
2　層　褐色細砂層　褐色土主体　5㎜～20㎜大の石極少

3　層　明褐色粗砂層　赤色砂主体　5㎜～20㎜大の石を5％含む

4　層　黄褐色粗砂層　青色砂主体　5㎜～20㎜大の石を40％含む

5　層　にぶい黄褐色シルト層





D－167

1　層　にぶい赤褐色粗砂層　As－C5％　Hr－FP5％

2　層　灰褐色粗砂層　As－C極少　砂混じり

D－168

1　層　褐色粗砂層　As－C極少　粘土混じり

2　層　灰褐色細砂層　焼土粒、炭化物ともに極少

D－169

1　層　灰褐色粗砂層　As－C極少　砂混じり

D－170・171

1　層　暗褐色細砂層　As－C5％　Hr－FP5％

2　層　暗褐色粗砂層　砂混じり

Fig. 19　W－14，D－167・168・169・170・171

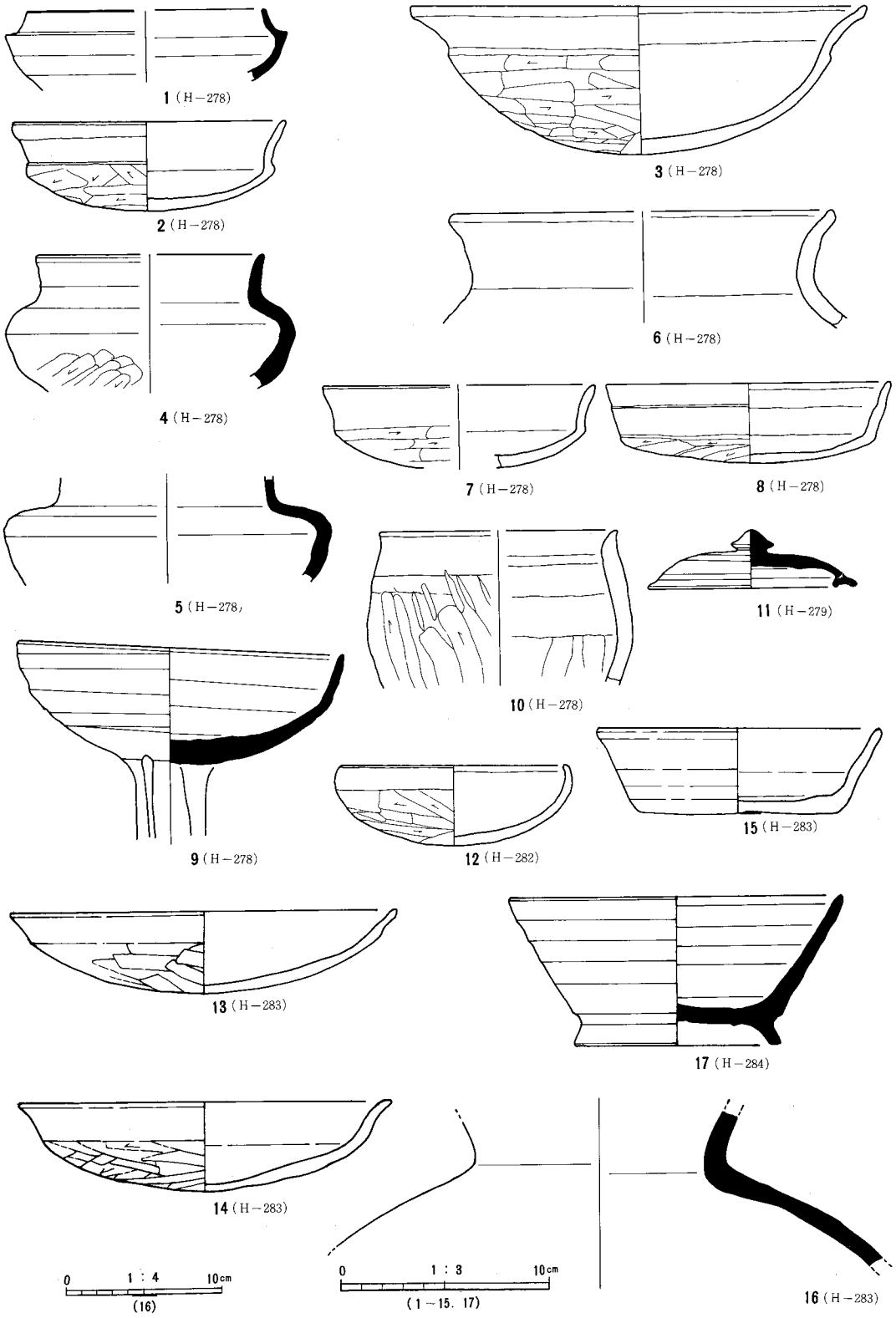


Fig. 20　H－278～284号住居址出土土器

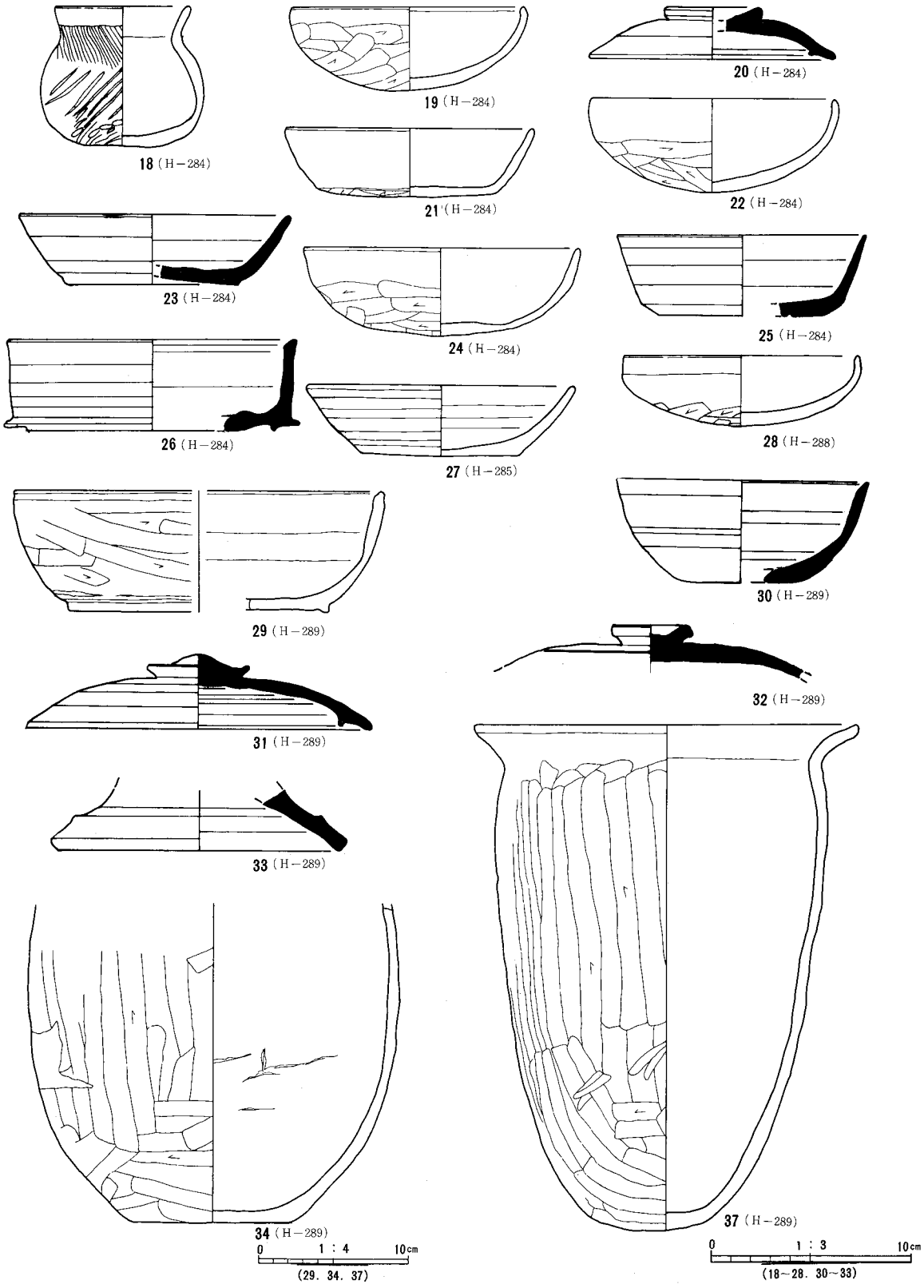


Fig. 21　H－284～289号住居址出土土器

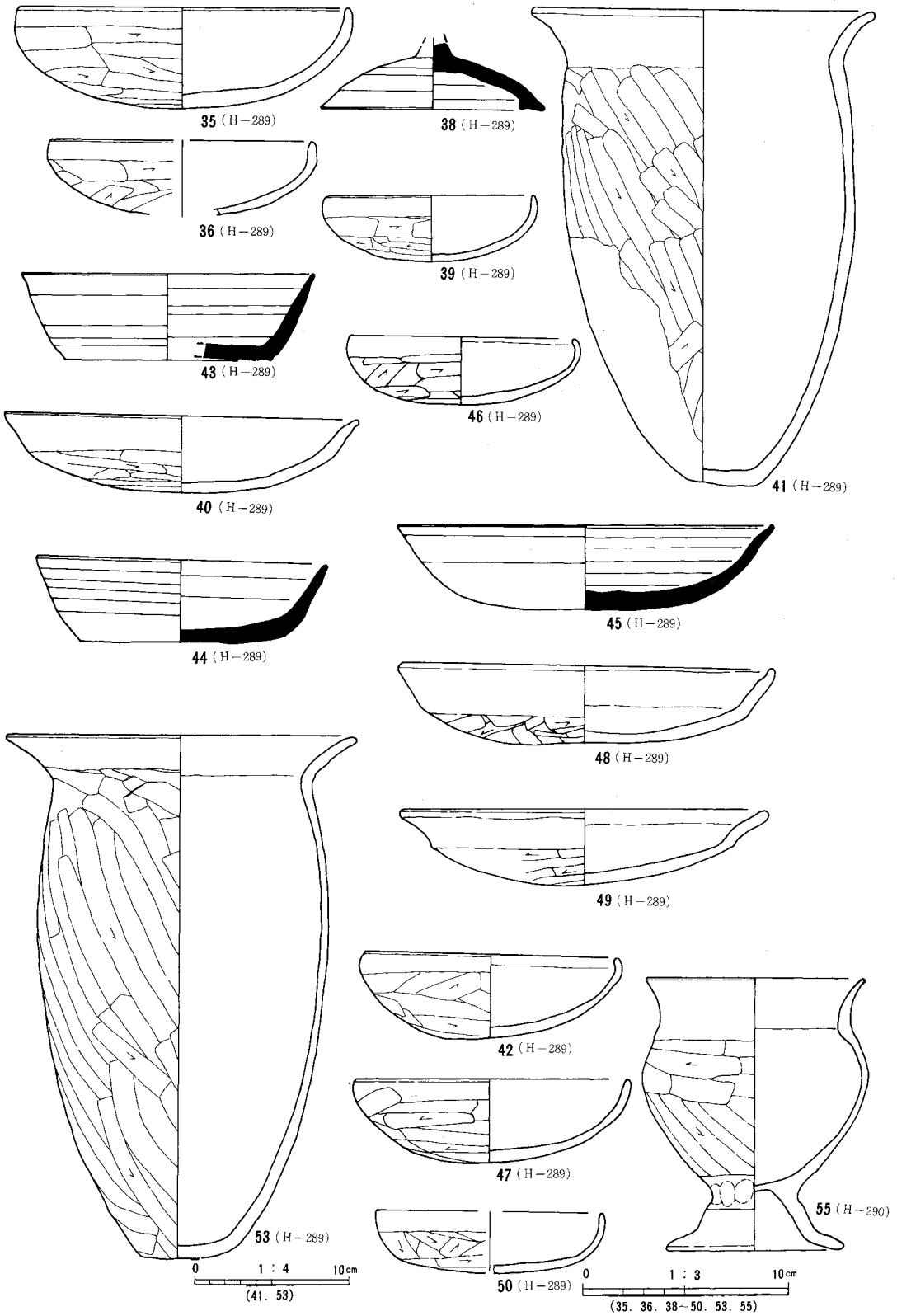


Fig. 22　H－289・290号住居址出土土器

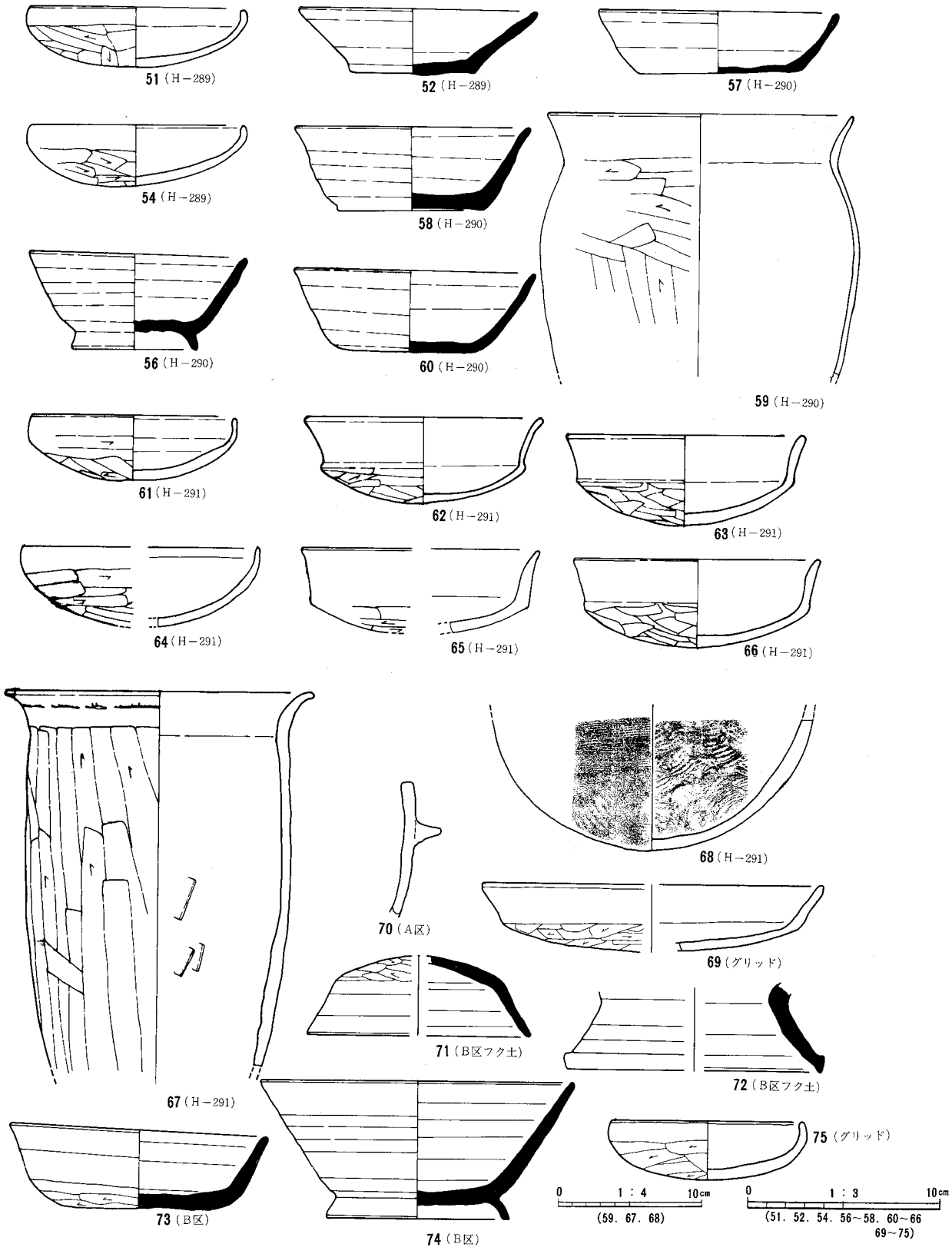
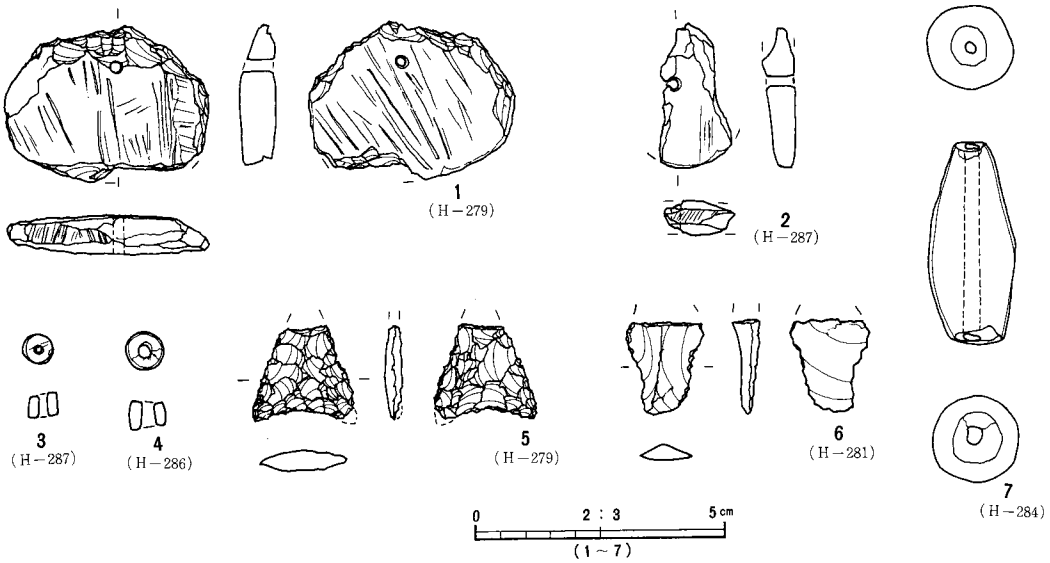


Fig. 23　H－289～291号住居址出土土器、A・B区表採土器



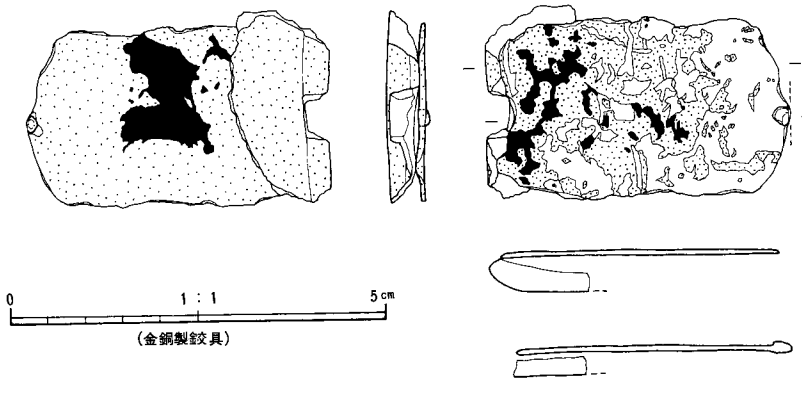
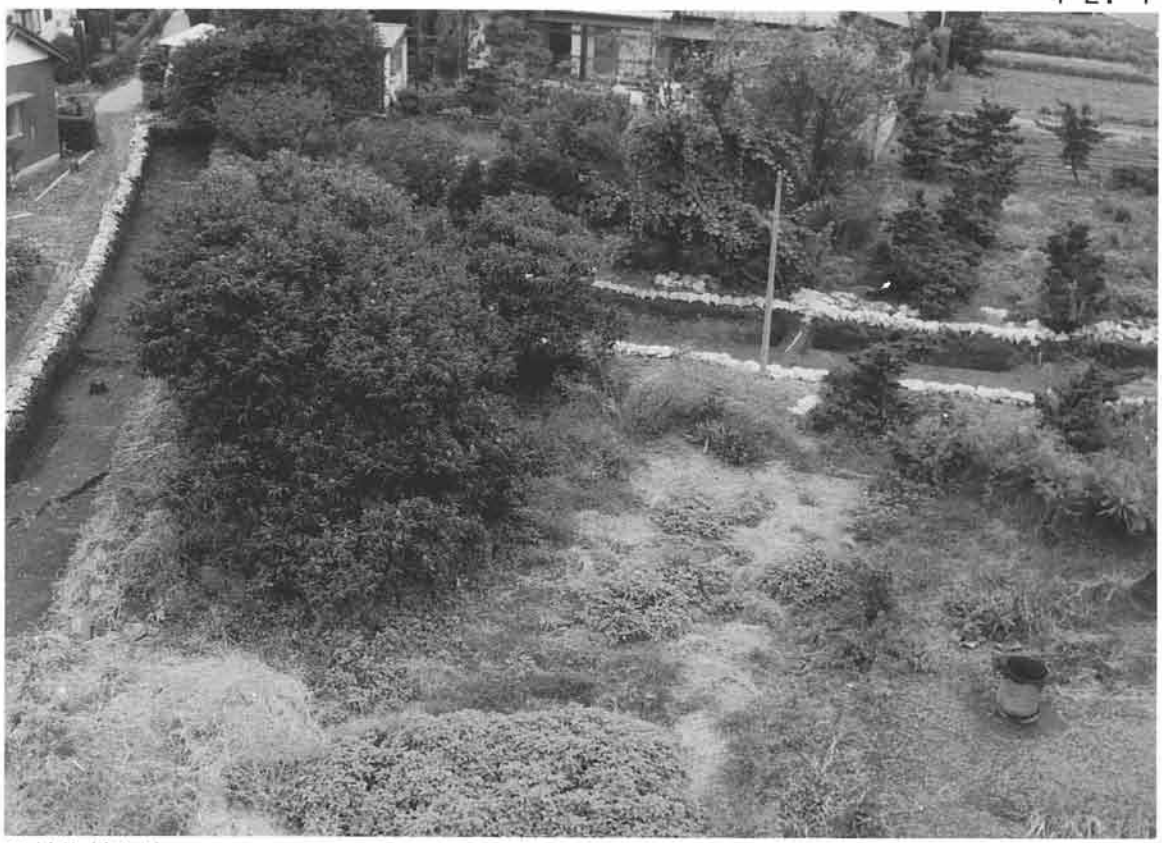


Fig. 24　石器・石製品・土製品・金属製品



A区全景（南から）

H－277号住居址（東から）

H－278号住居址遺物出土状態（東から）

H－278号住居址（東から）

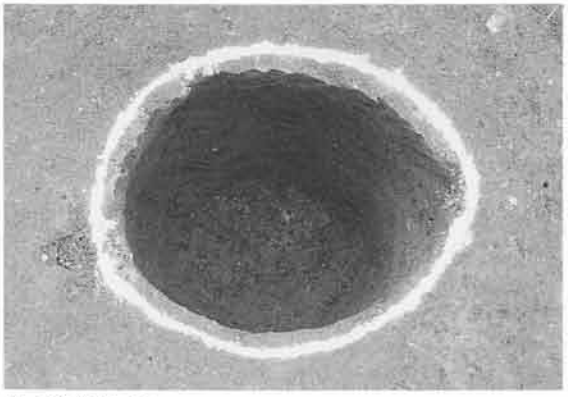
W－14トレンチ（東から）

PL. 2

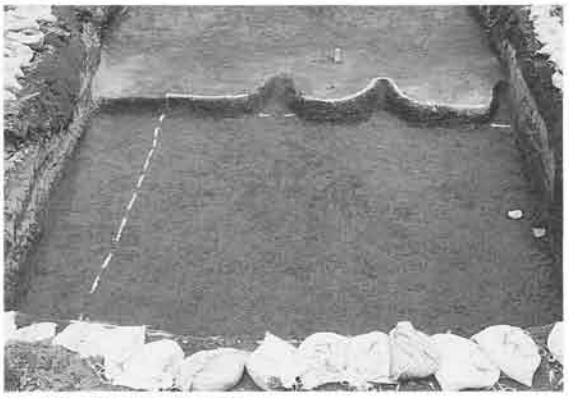
H－284号住居址（北から）

H－279号住居址遺物出土状態（西から）

H－279号住居址カマド（西から）

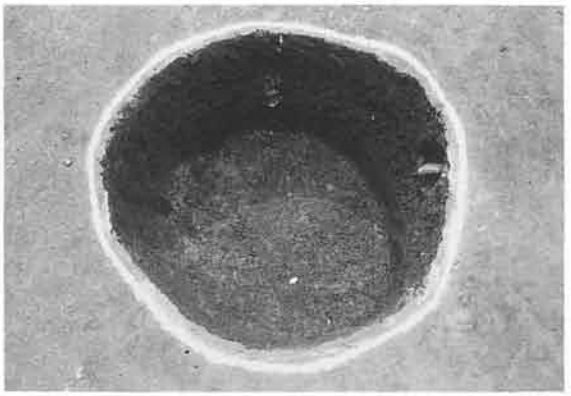


D－168（西から）



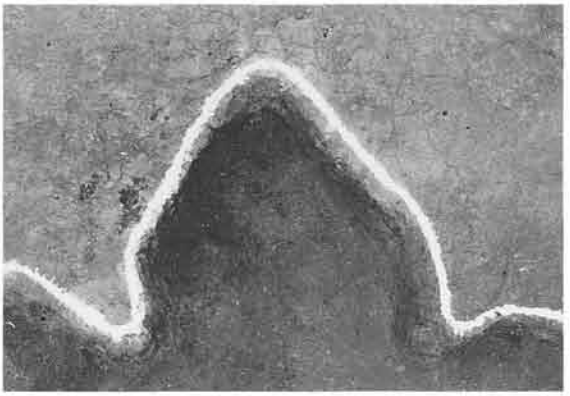
H－279・281号住居址（西から）

H－285号住居址カマド（北西から）



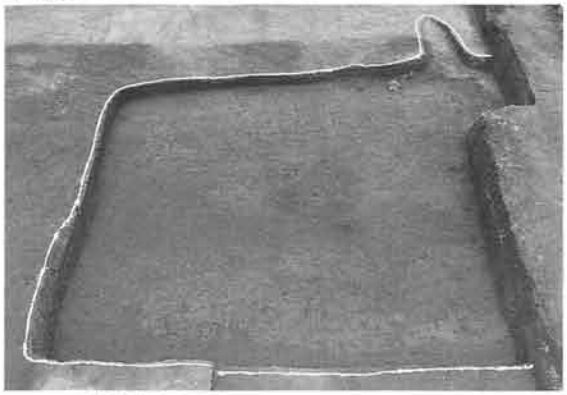
D－170（北から）

B区南遺物出土状態（西から）



H－286号住居址カマド（西から）

H－286号住居址（西から）



H－288号住居址（西から）

H－288号住居址カマド（北西から）

H－289号住居址遺物出土状態（西から）

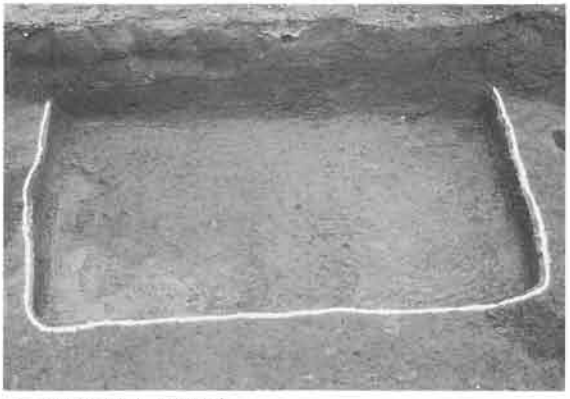
H－289号住居址遺物出土状態（北から）

H－289号住居址（西から）

B区西全景（南から）

H－290号住居址（東から）

H－291号住居址遺物出土状態（西から）



H－291号住居址（西から）

作業を終えて

PL. 6

2
(H－278)

8
(H－278)

9
(H－278)

3
(H－278)

11
(H－279)

12
(H－282)

14
(H－283)

18
(H－284)

21
(H－284)

23
(H－284)

19
(H－284)

17
(H－284)

27
(H－285)

28
(H－288)

49
(H－289)

45
(H－289)

39
(H－289)

37
(H－289)

42
(H－289)

47
(H－289)

54
(H－289)

40
(H－289)

53
(H－289)

48
(H－289)

46
(H－289)

52
(H－289)

41
(H－289)

44
(H－289)

43
(H－289)

38
(H－289)

55
(H－290)

57
(H－290)

60
(H－290)

58
(H－290)

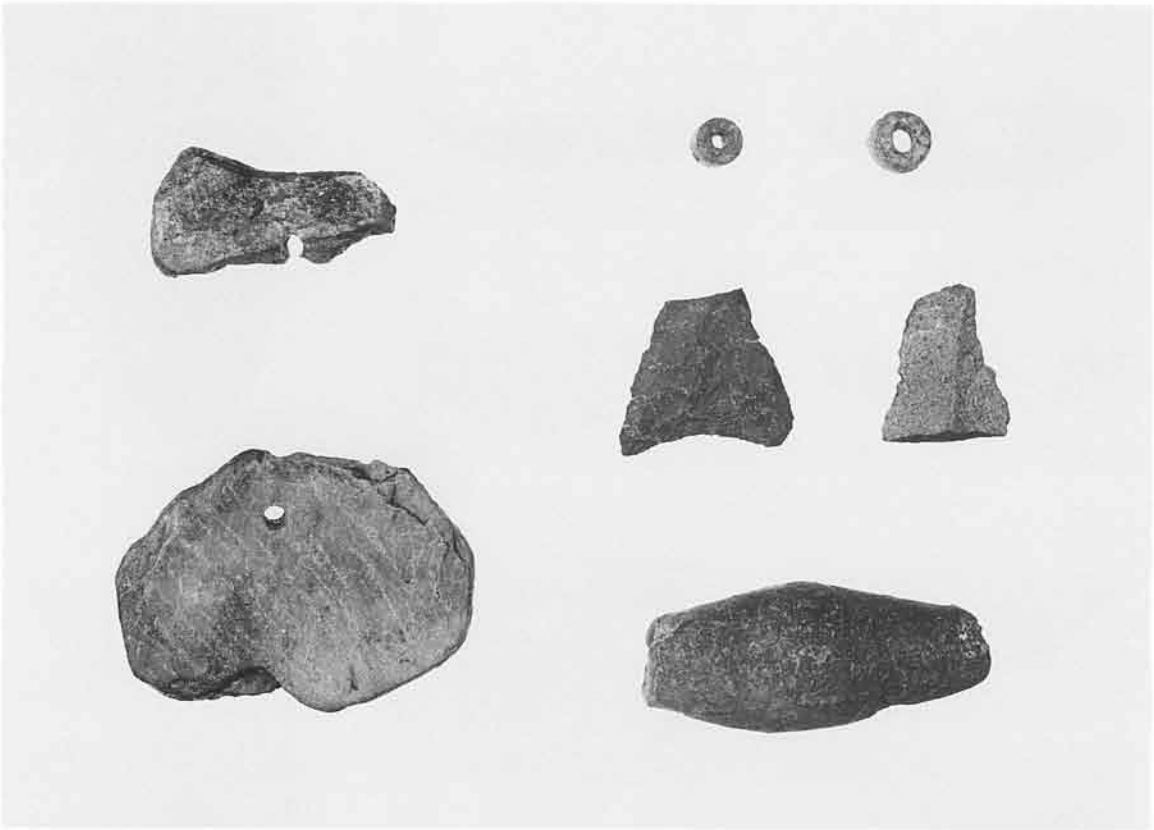
56
(H－290)

62
(H－291)

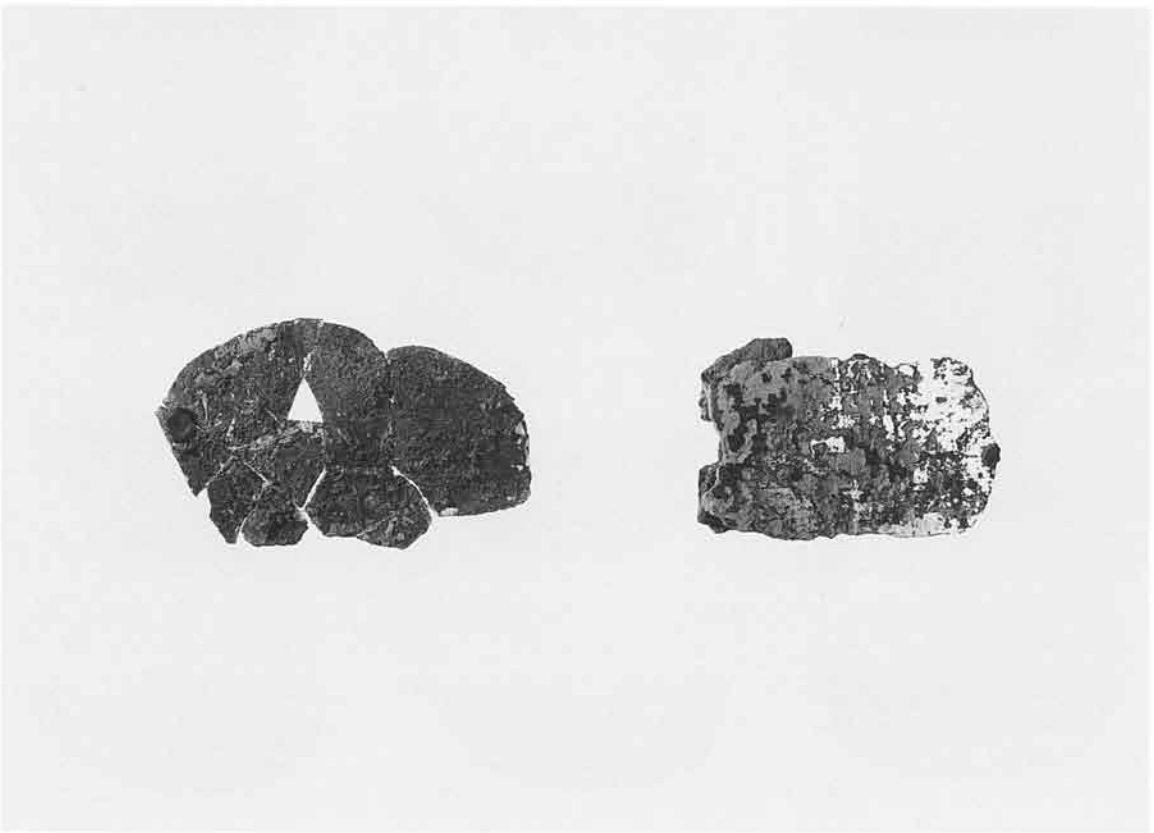
63
(H－291)

64
(H－291)

PL. 8



1．石器・石製品・土製品



2．金属製品

抄　　録

フ リ ガ ナ	オオヤシキイセキゴ
書　　名	大屋敷遺跡 V
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	オオヤシキイセキ
シリーズ番号	5
編 著 者 名	齊藤　仁志　　吉田　聖二　　井野　誠一
編 集 機 関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371　群馬県前橋市上泉町664－4
発 行 年 月 日	西暦1997年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード 市町村	 遺跡番号	位置 北 緯	 東 経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
オオヤシキ 大屋敷遺跡V	ﾏｴﾊﾞｼｼｿｳｼﾞｬﾏﾁ 前橋市総社町	10201	8A60	36°24′00″	139°02′18″	19960508 19961021	972㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
大屋敷遺跡V	集落跡	古墳時代 ～平安	竪穴住居址14軒、 溝址1条、土坑5基他	縄文土器、須恵器、土師器 石製模造品、臼玉、鉄器等
特 記 事 項	金銅製鋲具（H－221号住居址出土・平成7年度調査）			

大 屋 敷 遺 跡 V

平成9年3月18日　印　刷
平成9年3月25日　発　行

編集発行　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531

印　　刷　　株式会社　開文社印刷所